『カンディッド』は何故傑作なのか？

阿　部　律　子

Ⅰ．序

「ヴォルテール Voltaire（本名フランソワ＝マリー・アルエ François-Marie Arouet）（1694-1778）は，フランス18世紀の啓蒙[1]時代を代表する哲学者であり，その代表作は哲学コント『カンディッド *Candide*』（1759）である」と，フランス文学を多少なりとも学んだ人ならば，ヴォルテールについてこのような知識を多かれ少なかれ持っているのではなかろうか[2]。彼の祖国フランスでは『カンディッド』と言えば，もはやほとんど古典的な作品の範疇に分類されていて，中等以上の教育を受けた人なら誰しもが，『カンディッド』の抜粋を国語の授業で一度や二度は必ず目にしたことがあると言っていいほどに有名な作品である。そのような作品であるがゆえに，この哲学コントは大学入学資格試験であるバカロレアの国語の問題にも出題されやすい作品だと言われている。そのために，この哲学コントの内容や意味を詳細に説明しながら，試験に出そうな問題とその対策を示した『解説つきカンディッド』は受験生必読書のベストセラー[3]になっている。このような観点から言うならば，「ヴォルテールの代表作は『カンディッド』である」という作者と作品を密接に関連づけて端的に表現されたこの定義は確かに間違いであるとは言えないであろう。それにまた，フランス文学のみならず他の外国文学についても同様であると思われるが，例えば大学で何らかの外国文学を専攻したり，あるいは教養科目として外国文学

関連科目を選択した人であるならば，試験のために，有名な作家の作品を十分に理解することもなく，あるいはその作品のよさを味わうことさえなく，「ヴォルテールは，フランス18世紀の啓蒙時代を代表する哲学者であり，その代表作は『カンディッド』である」というような幾度となく繰り返されたトートロジー[4]を何の疑いもなく，そして愚かしくも，次から次へと頭の中に詰め込んでいった記憶が恥かしながら筆者を含めて誰しも多かれ少なかれあるのではなかろうか。

しかしながら，このようにほんの１，２行で表現された定義によって作家のすべてを物語ることができるのであろうか。確かに，一生涯で数冊しかものにしなかった寡作の作家であるならば，それも可能であろう。ところが，ヴォルテールほど多才にして多作であり[5]，しかもそれに加えて，その人生たるや波乱に満ち満ちた[6]作家に対して，果たしてこのような簡便な，あるいは安易な定義を当てはめることができるのであろうか。実際メルヴォー氏 Christiane Mervaud も言うように，ヴォルテールほど有名な作家も数少ないが，彼ほど誤解されている作家も他に類を見ないからである[7]。しかも，彼が引用される場合は，ほとんど常にと言っていいほど，その多作が災いしてか，あまたある作品の中のある一作品のほんの一部分か，ひどい場合には，その一部分のほんの数行だけが引用されるか，あるいは，彼に対して必ずしも好意的であるとは言いがたい批評家たちの断片的な知識のみが引用されるという具合に，ほんのわずかな情報のみで彼の思想全体が判断されたり，断定されたり，あるいは時としては断罪されるという傾向にあるからだ。やはり，彼が言わんとすることを十分に理解しようと思うならば，彼の作品のすべてとまでは言わないにしても，少なくとも10や20の著作を通読あるいは精読しなければ，実際のところ，彼独自の哲学思想の全体像は見えてこないのではなかろうか。もちろん，彼の作品数は膨大であるがゆえに，ヴォルテールの研究者でさえも，一生かかってもその全作品を読みこなすことはほとんど不可能であると言われているにせよ，それでも，彼については特に言うことができるのであるが，判断する前に，

まずはその作品を十分に読みこなすことが必要であろう。例えば，彼の女性観にしても，『カンディッド』に登場するキュネゴンドや老婆やパケットだけを取り上げて，これが彼の女性観だと主張するならば，大きな間違いを犯すことになる[8]。というのも，彼は哲学コントや一部の滑稽譚を除いては多くの作品の中で女性をむしろ好意的に描いているし，時には女性の資質を高く評価さえしているからである[9]。ところが，不幸にして，現在ではヴォルテールの作品と言えば，彼の膨大な作品群の中でもほんのわずかな部分を占めるに過ぎず，しかも彼が気晴らしとして書いた哲学コントだけしか読まれなくなってしまったうえに，コントの中の女性描写にしても，ことさら女性の欠点をあげつらい，それをまた辛辣に描いているがゆえに[10]，非常に誤解を受けやすいことも否めない事実である。この傾向は単に女性観だけにとどまらない。というのも，哲学コントの中で述べられていることは，確かに彼の深層心理的な部分や本音の部分を暴いているとしても，それは彼の思想全体を表すものではないからである。

以上述べたことから考えてみても，彼を定義する等式「ヴォルテール＝啓蒙哲学者／ヴォルテールの代表作＝『カンディッド』」は果たして彼の存在や活動を的確かつ総合的に表現しているのであろうか，この等式はあまりにも極端な形で我々に提示されているのではなかろうか，という疑問が当然のことながらわいてくるのである。しかも，こうした等式自体が，実際のところ，ずっと後世になってから成立したものであり，彼の存命中の18世紀にはほとんど存在していなかったと言っても過言ではないからである。恐らくヴォルテール自身も，まさか自分の代表作が『カンディッド』であるなどと後世から評価されるとは夢にだに思ってはいなかったのではなかろうか。従って，我々はこの等式をもう一度検証し直す必要があるように思われる。そして，後世はいったい何故に『カンディッド』を彼の代表作と位置づけたのか，本論ではこれらの点について論じてみたい。

II．劇作家，叙事詩作家ヴォルテール

彼が生きたフランス啓蒙の世紀である18世紀において，人々は彼に対していったいどのようなイメージを抱いていたのであろうか。先に述べた「ヴォルテールは，フランス18世紀の啓蒙時代を代表する哲学者であり，その代表作は『カンディッド』である」という定義のうちで，まず「ヴォルテールは啓蒙哲学者である」という点から検証を始めてみよう。

一言で言えば，彼は確かに啓蒙哲学者ではあった。しかし，それは必ずしも彼が当初から啓蒙哲学者として広く一般の人たちから認識されていたことを意味しない。確かに彼には非常に若い頃からすでに将来啓蒙哲学者にならんとする萌芽が垣間見られてはいたものの，あえて言うならば，彼は啓蒙哲学者になったのであり，しかもそれもかなり後年になってからのことで，最初から啓蒙哲学者としてデビューしたわけではなかった。もちろん，彼は彼よりも20才近くも年下であったルソーJean-Jacques Rousseau（1712-1778）や，ディドロ Denis Diderot（1713-1784），あるいはダランベール Jean Le Rond d'Alembert（1713-1783）たちなど，いわゆる『百科全書』派世代の啓蒙哲学者たちには一歩先んじてはいたが，例えば，『ペルシャ人の手紙 *Lettres persanes*』（1721）や『法の精神 *De l'Esprit des lois*』(1748)を著した同年代のモンテスキューCharles-Luois de Secondat, baron de Montesquieu（1689-1755）に比べると，彼の啓蒙哲学者としての出発は，ポモーRené Pomeau が指摘したように[1]，少なくとも10年以上は遅れていたのである。というのも，彼の啓蒙哲学者としての信仰告白書，あるいは意見表明[2]の書ともなった『哲学書簡 *Lettres Philosophiques*』(1734)は，他国の事情を紹介することによって間接的に祖国の諸制度を批判するという同じような手法で書かれた『ペルシャ人の手紙』よりも14年も遅れて出版されているからである。しかも，この『哲学書間』自体確かに啓蒙哲学者としての出発を示すものではあったにせよ，啓蒙哲学者としての活動を全面的に展開することを意味してはいなかった。それにまた，

『ペルシャ人の手紙』や『哲学書間』が出版された18世紀前半というは，エラール氏も指摘するように，確かに啓蒙思想の形成期，あるいは揺籃期ではあったが，この時期は18世紀後半に見られるような新旧思想の全面的な対立はまだ明白ではなく，「宗教と科学，禁欲主義と自由主義，伝統と革新の間の不安定で対立に満ちた妥協」[3]の時代であったからだ。従って，啓蒙哲学者と呼ばれる，あるいはそう呼ばれるようになる作家たちの言動も革新的ではあったが，それでも世紀後半に比べるならば，まだ穏やかなものであり，彼らの活動自体も限定的であったと言えよう。もちろん，世紀の中葉に近づくに従って，その革新性は次第に明確になっていったが。

それでは，啓蒙哲学者として祖国のフランスはおろかヨーロッパ中に知れ渡る以前のヴォルテールとは，いったいどのような人物であり，どのような作家であったのだろうか。ヴォルテール研究の泰斗であったポモーでさえも，「彼の作家活動のすべてを数ページやそこらでまともに勉強しようなどとはとんでもないことだ」[4]と言うほどに，ヴォルテールという作家は若い頃から多種多様な作家活動を展開していた。その中でも特に有名なのが，17世紀フランス古典劇の大作家であったコルネイユ Pierre Corneille (1606-1684) やラシーヌ Jean Racine (1639-1699) の後継者として自他ともに認める正統派の劇作家[5]としての活動であった。彼は生涯で悲劇作品，喜劇作品の双方合わせて50余編にものぼる劇作品を著した大劇作家であった。彼のデビュー作も，古代ギリシャの大劇作家ソフォクレス Sophocle の作品として演劇通でなくとも知らない者はいないほど有名で，しかも，1659年にはコルネイユも翻案してさらにその知名度を増した悲劇作品『エディップ（オイディプス）*Œdipe*』(1718) であった。これは，彼が若い頃からすでにコルネイユやラシーヌを意識し，彼らのような正統派の劇作家になることを到達目標の第一に掲げ，そしてできることならば彼らを超越したいと心中密かに願っていたのではないかとさえ思わせるものである。もちろん，彼の思惑は当り，『エディップ』はコメディ＝フランセーズで初演から一気に29回もほぼ連続して上演され，これにパレ＝ロワイヤルの4

回が加わった。当時劇作品としては15回から20回上演されれば上出来と考えられていたことからすれば，『エディップ』がいかに大成功を収めたかが分かる[6]。彼はこの作品一作で一躍フランス演劇会の寵児となったのである。

彼の50余編の劇作品のうち，18世紀前半に発表された悲劇作品だけを見ても，『ブリュテュス（ブルータス）*Brutus*』(1730)，『ザイール *Zaïre*』(1732)，『アデライッド・ドゥ・ゲクラン *Adélaïde de Guesclin*』(1734)，『セザール（シーザー）の死 *La Mort de César*』(1735)，『アルジール，あるいはアメリカ人 *Alzire ou les Américains*』(1736)，『ジュリーム *Zulime*』(1740)，『狂信，あるいは予言者マホメ(マホメット) *Le Fanatisme ou Mahomet le prophète*』(1741)，『メロップ *Mérope*』(1743)，『セミラミス *Sémiramis*』(1748)，『オレスト *Orest*』(1750)などがあるが，これらの中でも特に，『エディップ』，『ブリュテュス』，『ザイール』，『シーザーの死』，『アルジール』，『マホメ』，『メロップ』，『セミラミス』は彼の悲劇傑作10編のうちに数えられている[7]。なかんずく『ザイール』は，『エディップ』同様に，発表されるやいなやたちまち大成功を収め，若きルソーも感涙にむせんだとさえ伝えられるほどで，ヴォルテールの劇作品の傑作として上演され続け，20世紀になってからも上演の記録を持つ作品であった。

彼は劇作家として華々しく演劇界にデビューし，その後もヒット作を放ち，コルネイユやラシーヌの押しも押されぬ後継者と見なされていたが，それだけではなかった。彼は1723年には後に『ラ・アンリアッド *La Henriade*』(1728) として有名になる『リーグ，あるいはアンリ大王 *La Ligue ou Henri le Grand*』を発表してからは，「フランスのウェルギリウス Virgile de France」の異名[8]をとる叙事詩作家としても広く知られるようになる。

こうして彼は少年の頃から夢にまで見たヨーロッパ中で広く名の知れた[9]当代随一の劇作家[10]，あるいは叙事詩作家となり，大活躍していたのである。従って，彼が生きた18世紀の人々にとってヴォルテールと言えば，

まず「劇作家ヴォルテール」であり，そして「叙事詩作家ヴォルテール」という印象が大変強かったのである。その証拠に，ディドロでさえも『ラモーの甥 *Le Neveu de Rameau*』(執筆1760年-1772年，ゲーテのお陰で1805年出版）の中で，「韻文作家と言えば，ヴォルテールだ。その次は，誰だ。その次もヴォルテール・・・」[11]とラモーの甥に語らせているほどである。それほどまでに，ヴォルテールの天才的な韻文作家としての印象は強かったのである。ディドロにとって，天分に恵まれ，永遠を約束され，同時代の神的な存在はヴォルテールであった[12]。この時代は今と異なり，演劇が文化の中心であったことを考えれば，ヴォルテールのこのイメージは我々が想像する以上に強烈であったに違いない[13]。

彼はこのように当代随一の正当派の劇作家や叙事詩作家として大活躍していたが，しかしながら，彼の劇作品は彼が到達目標に定めたコルネイユやラシーヌなどの古典劇の作品と比べるならば決定的に異なる点があった。というのも，元来批判精神が非常に旺盛で後年啓蒙哲学者となるべく傾向を持っていた彼は，単なる娯楽のために劇作品や叙事詩作品を書くことは決してなく，その作品の中に彼独自の啓蒙哲学思想を密かに，そして巧みに盛り込んでいったからである。では，何故に彼は啓蒙思想を前面に立てて作品を仕上げることを避けたのかと言えば，革命以前の検閲制度は大変厳しく，作家が自由自在に体制や教会を批判することは厳に禁じられていたからである。もし大胆にもその禁令を犯せば，逮捕や焚書処分どころか，時には死罪さえも覚悟しなければならず，作家はその政治思想や哲学思想を作品中で明確な形で表明することはできなかったのである。そのために，彼は文学という手法を縦糸に思想を横糸に巧みに作品を織り上げていったのである[14]。こうして彼の劇作品の中には常に宣伝のための政治的・宗教的・哲学的思想が実に巧妙に配置されていて，メルヴォー氏は彼の劇作品を「戦闘的劇」[15]とまで称しているほどである。彼の悲劇作品中における思想宣伝を詳細に分析したリッジウェイ Donald S. Ridgwey の研究は有名である[16]。もちろん，彼にこのような反体制的思想傾向があることは当局も

十分承知しており，彼の作品は常に厳しい検閲の対象となっていたが，危険思想の作品を著す作家としての彼の存在自体も常に監視の対象となっていた。こうした反権力・反体制的思想傾向を持つ彼は，当代随一の劇作家であっただけに，権力側にとっては厄介な存在であった。しかし，その反面，体制や社会を改革しようと願う者たちにとっては頼りになる先輩作家でもあった。このような傾向があったからこそ，1740年代後半から1750年代にかけてディドロやダランベールが中心となって推進したフランス18世紀啓蒙思想の象徴的作品，あるいは金字塔でもある『百科全書 *Encyclopédie*』の出版[17]に対して大いに理解を示して，自らも45にものぼる項目を担当しながら積極的に協力し，啓蒙思想の伝播に努めたのである。ただ，この協力も『百科全書』の出版当初からではなく，後に述べるプロシアやフランクフルトでの苦い経験の後に，ライン川流域を南下する放浪の旅の途中のコルマールから1754年にヴォルテールがダランベールに手短にしたためた「文学」の項目を送ったのがきっかけとなった[18]。それでも，辞典や項目の概念自体が百科全書編集者たちとは根本的に違っていた。彼は辞典というものは必要な事項だけが簡潔に書かれるべきであると考えていた。このような辞書に対する考え方の違いが，後の『携帯哲学辞典 *Dictionnaire philosophique portatif*』（1764）の執筆へとつながっていくのである[19]。そうとはいえ，『百科全書』に対する弾圧が強まり，この辞典の出版が危機に瀕する1758年頃からは全面的な協力を惜しまず，先輩作家として他のメンバーの先頭に立って出版を推進していく[19]。

以上のように，彼は思想的傾向を持った劇作家であり，叙事詩作家であった。それでも，彼の思想の方向性という意味では18世紀中頃までは，先に述べた時代的な背景とともに，まだ明確な形をとってはいなかったと言えよう。彼は1750年にプロシア王のフリードリッヒ2世 Fréclérie II, roi de Prusse の求めに応じてポツダムに向かうが，その時にはすでに『50人の説教 *Sermon des cinquante*』[20]という，聖書を詳細に調べてその内容の信憑性や矛盾点を鋭く突いて徹底的に批判した激越な反キリスト教的パンフ

レットを書いてはいたが，それでもまだ当時の彼は自分がこの先，人権，あるいは思想や信仰の自由のために広範囲に活動を展開することになるだろうなどとはまったく思っていなかったようである[12]。それにまた，啓蒙思想家と言っても，当時の彼はまだ知的有産階級，あるいは公権力側という非常に限られた範囲においてしか啓蒙思想家として認識されていなかったのではなかろうか。というのも，公権力側はともかくも，劇作品にしろ，彼の作品に直接触れることができる人たちの人数もかなり限られていたからである。従って，彼は反体制的思想を抱いてはいたが，『百科全書』に対する協力も，劇作家や叙事詩作家，あるいは後ほど述べる他の作家活動の片手間に行ったものであり，ヴォルテールを本格的な啓蒙思想家として位置づけるにはまだ時を待たねばならなかったと言えよう。

Ⅲ．歴史作家ヴォルテール

ヴォルテールは劇作家や叙事詩作家として知られていたが，「近代ヨーロッパ第一の歴史家」[1]として多くの作品を残している。彼がいつ頃から歴史に興味を抱くようになったかについては詳しくは分からないが，彼の歴史意識の目覚めとしてポモーは彼のルイ＝ル＝グラン学院時代の1709年の寒い冬にさかのぼるのではないかと言っている[2]。この冬はことさら寒く歴史にも残る厳冬であり，河川も凍り，農業の収穫も大打撃を被っていた。しかも，スペイン王位継承戦争の敗戦もあって，社会全体に言いようもない不安が広まっていた。こうした状況の中で，彼は学院の教師や級友たちと寒さに凍えながらストーブを囲み，批判精神鋭く時事について議論に興じていたのである[3]。こうした社会状況は多感な思春期を迎えたフランソワ＝マリーになおいっそう社会や歴史に対する意識や感覚を呼び起こしたものと思われる。それにまた，学院時代の彼は，中近東やアフリカはもちろんのこと，遠くは新大陸や中国までも布教のために赴いたイエズス会の宣教師たちから送られてきた報告書や，彼らが著した歴史書なども興味深

く読んでいた[4]。こうした読書によって，世界の地理や歴史についての幅広い教養を得ると同時に，物事を相対的に考察する精神や鑑識眼が次第に涵養されていったものと思われる。また，この頃から彼はタンプルの懐疑的で，反宗教的・反権力的思想を標榜するリベルタンたちのもとに出入りするようになる。彼らと議論することによって批判精神もよりいっそう鋭くなっていったものと思われる。これらの経験は将来歴史家になるための重要な基礎になったと言えよう。

彼が歴史というものに実際に触れるようになったのは，悲劇作家や叙事詩作家の伝統に従って作品の題材を史実に求めたからである。そして，作品をより正確に描写するために歴史書や史料を詳細に調べていくうちに，歴史そのものが彼の興味の対象となったのである。しかし，それ以前も彼がまだ文壇にデビューする前，反体制的なパンフレットを書いてスキャンダルとなったり，生まじめな公証人の父から見れば自堕落な生活を送っていたために父の要請でバスティーユに投獄されたこともある青年時代に，コーマルタン侯爵 Louis Urbain Lefèvre de Caumartin, marquis de Saint-Ange というルイ14世時代の生き証人と知己を得て，彼から直にルイ14世やその時代について，あるいはアンリ4世について話を聞いたことが，彼にとってフランスの近過去の歴史について興味を抱く大きなきっかけともなっていた[5]。この経験は彼の最初の叙事詩である『リーグ，あるいはアンリ大王』の執筆にもつながっていく。しかし，この当時の彼は，韻文詩作家になる意志は固かったものの，自分が歴史作品を著すことになるなどとは，これもまた彼の念頭になかったのは確かである。彼はまた，1725年から1727年にかけての2年半に及ぶイギリス滞在中には，ファブリス男爵 Frédéric Ernest, baron Fabrice というスウェーデン王シャルル（カルル）12世の元側近に直接会って話を聞くこともできた[6]。これは近隣諸国の近過去の歴史を書く契機となった。彼は歴史書を書く場合にはできるだけ多くの史料を集めて，それらを比較検討したが，それと同時に，この二つの大きな経験のように，時代の生き証人に会って彼らから直に話を聞くとい

う従来の歴史記述にはない新しい手法が，生来のジャーナリスト的感覚とも相まって，彼の歴史作品作成の大きな特徴ともなった。しかも，彼は現在のメディアの記者たちのように，直接聞いた話を手帳に留める手法もとっていた。この手法は非情に現代的であり，彼はこの分野でも時代を先取りしていたと言えよう。

このような手法を取ってまず書かれたのが『シャルル（カルル）12世史 *Histoire de Charles XII*』(1731) であった。この作品は出版後10年間で12版も版を重ね（ヴォルテールの生前だけで60数版を重ねた）好評を得た。しかし，それと同時にこの作品はデ・ロシュ・ドゥ・パルトゥネー師 abbé Des Roches de Parthenay やノルドベリ Jöran Anders Nordberg などから間違いを指摘されたり，批判を受けたために，彼らの批判に対して反駁したり，彼らの意見を受けて修正したりしているうちに，歴史における細事の意味について考えざるを得なくなり，そこから史料批判の精神と社会史への志向が頭をもたげてきたのではないかと安斎氏は言っている[7]。いずれにしろヴォルテールは,「これらの人々について史料を提供した人々とて間違っている可能性は十分にあります。現代史を書くことがどれほど難しいか私は痛感しました。同じ事件を目撃した人々も皆その事件を別々の目で見ているのです。証人たちは互いに矛盾した発言をしています」[8]と彼はフリードリッヒ２世に宛てて書いている。こうして彼は史料の扱いと記述の重要性も次第に認識していったのである。

こうした経験を踏まえて彼が本格的に歴史作品に取り組もうとする大きなきっかけとなったのは，その後知的生活をともにするようになった才気煥発で科学的で明晰さを好む精神の持ち主であったデュ・シャトレ侯爵夫人 Emilie Le Tonnelier de Breteuil, marquise Du Châtelet が曖昧模糊となりがちな歴史学を嫌ったためであると言われている。彼は彼女に歴史のよさや面白さを理解させたいがために，自らが本格的に歴史作品の執筆に取りかかったようである。彼は1741年から後に『世界史と今日にいたるまでの諸国民の習俗および精神についての試論（俗に『習俗試論』と呼ばれ

ている）*Essai sur l'histoire générale et sur les mœurs et l'esprit des nations jusqu'à nos jours*』（1756）のもととなる『世界史試論 *Essai sur l'histoire universelle*』を書き始めたのである。それと同時に，『歴史に関する考察 *Remarques sur l'Histoire*』（1742），あるいは『歴史に関する新論考 *Nouvelles Considérations sur l'Histoire*』（1744）なども著して，そこで自らの歴史観や歴史記述の手法を主張したのである。彼は『歴史に関する考察』の中で，「記憶の代わりに理性を用い，書き写すのではなく，検討しようと努めるのなら，書物や誤謬が無限に増殖していくことはあるまい。新奇で本当のことだけが書かれるべきであろう。歴史を編纂している人々に通常欠けているのは哲学的精神である」[9]と書き，また，『歴史に関する新論考』の冒頭では，「恐らく歴史の叙述においても，物理学で起こったことがもうじき起こるだろう。新たな諸発見が古い諸体系を放逐した。人々は，今日自然哲学の基礎となっているこの興味深い細部において，人類を知りたいと思うようになるだろう」[10]と言って，彼の歴史に対する基本的な考えを述べている。これはモーペルテュイ Pierre Louis Moreau de Mauperutuis とともに初めてニュートン Isaac Newton の物理学をフランスに紹介し，精子の発見で有名なオランダのレーウェンフーク Antonie von Leeuwenhoek の生物学に興味を示して実際にオランダで講義を受けるなどして，時代の先端をゆく科学的な思考を積極的に取り入れた彼ならではの考えであった。いずれにしろ，彼の歴史に対する考察の集大成は後に『習俗試論』の序文ともなる，その名も『歴史哲学 *Philosophie de l'Histoire*』（1764）の中に詳しく見ることができる。

彼の歴史作品の特徴としては，それまでの古代史などが史実も不明確な「寓話」であったのに対し，それらの寓話をまず排除し，可能な限り多くの史料を集め，しかもそれを理性や良識のふるいにかけて厳選し，通史的に見て整合性があるものだけを史実として認識し，歴史を再構築している点をあげることができよう。これは歴史研究の手法としては非常に近代的である。一般的に彼はコントのイメージなどからか軽佻浮薄と受けとめられ

がちであるが，歴史に関する彼の情報は史料を駆使して得られたものであり，彼自身できるだけそうあるように努めた[11]。もちろんこのような合理的な歴史観から，ボシュエ Jacques Bénigne Bossuet に見られるような，神を歴史の主人公とする宿命論的・キリスト教的宇宙観で歴史を書くということも完全に排除した。そして，彼は歴史を織りなすのは神ではなく人間であるとし，人間を描写するだけでなく，人間の営みである文化や文明にも焦点を当てたのである。歴史を神の手から人間の手に引き戻した[12]という彼の功績は偉大であろう。

ヴォルテールは1745年にはラシーヌと同じようにフランス歴史編纂官という宮廷の重職に任命された。この職は1563年創設という古い歴史を持つもので，君臨する王の治世下で起こった事項を歴史に留めるのを役割としていた。彼は歴史編纂官として王立図書館などで自由に史料を読むことができた。そして，この地位を利用することによって，彼はこれから自分が執筆しようとする歴史作品に関してできるだけ多くの史料を収集することができたのである。歴史編纂官の役職のために書かれたのは『1741年戦史 *Histoire de la guerre de 1741*』であったが，この作品はフランスとプロシアの戦いを記したものであるが，執筆に際しては実際に戦場に赴いて描写するというジャーナリスティックな手法が取られた。しかし，この作品は宮廷の仕事の多忙さなども相まって完成までに時間がかかり，皮肉なことに敵国のプロシアで仕上げられ，最終的に『ルイ14世の世紀 *Le Siècle de Louis XIV*』(1752)に補遺として付け加えられた。また彼は歴史編纂官という役職のお陰でこの大著『ルイ14世の世紀』を書くための史料も十分に収集することができた。この作品は思い起こせば30年以上も前の若き日にコーマルタン男爵から直接話を聞いたことがその源となっていた。しかしながら，ルイ15世治下で亡きルイ14世の治世に関して歴史書を著すことは，間接的にはルイ15世の治世を批判することであった。そのために，フランスでは出版許可を得ることができず，この作品も皮肉なことにプロシアで出版されている。もちろんそこにはルイ15世のヴォルテールに対する悪感

情が反映されていた。しかしながら，この作品はこれまでの歴史書と比べるならば非常に画期的であった。というのも，『シャルル(カルル)12世史』にも見られるように，それまでの歴史書というのはある人物を中心に物語が展開されていたが，『ルイ14世の世紀』は題名からも推測できるように，この作品の描写の対象となったのはルイ14世その人ではなく，その時代に起こった事象のすべてであったからだ[13]。つまり，彼は歴史の対象を個人から社会へ，そして戦争や政治から人間の営みである文化や文明の歴史の描写へと発展させていったのである。しかもそれは，狭い地域の歴史から広く世界の歴史へと地理的にも広がっていった。ランソン Gustave Lanson がヴォルテールを「最初の文明史家」と称するゆえんである。彼が著した『習俗試論』はシュペングラー Oswald Spengler やトインビー Arnold Joseph Toynbee に通じる巨視的な比較文明論の萌芽がそこに見られるのである[14]。しかも，引用箇所の正確度も精度の高いものであった。例えば，ポモーの調査によると，『風俗試論』の引用では，正確な引用数319に対して，間違いはわずか9箇所に過ぎないという結果が出ている[15]。ここからも彼に対してなされる『風俗試論』は多くの書物の寄せ集めだという批判は当たらないであろう。また，ヘーゲル Georg Wilhelm Friedrich Hegel がその『歴史哲学講義 *Vorlesungen über die philosophie der Geschichte*』の中でヴォルテールには一言も触れていないということで，歴史家としてのヴォルテールに対する批判もある。もちろん，ヘーゲルがヴォルテールを引用しなかったのは，個人的な好き嫌いの感情や愛国主義的な感情が働いたのかも知れない。しかしながら，ヘーゲルに無視されたからと言って，ヴォルテールの歴史家としての価値が減じることも決してないであろう。安斎氏も指摘するように[16]，ヴォルテールに対する非難の中にはその後の学問の発達を無視してないものねだりをしているものが多いように見受けられる。すでに述べたように，ヴォルテールは当時としては先端をいく合理的・科学的な思考で歴史に取り組んでいたのである。彼の歴史作品の中には19世紀以降に発達する要素の萌芽をすべて包含していたことにむしろ

驚嘆すべきではないだろうか。安斎氏はヴォルテールの態度の中に,「アナル」学派にまで通じるものを見ている[17]。いずれにしろ，彼は当時からすでに歴史家として十分に認識評価されていて，『百科全書』の「歴史」の項目は彼の手によるものである。

彼が歴史から得た教訓は大きかった。彼は知人であるザクセンのザックス＝ゴータ公爵夫人 Louise-Dorothée, duchesse de Saxe-Gotha の依頼で，『帝国年代記 *Annales de l'Empire*』(1754) を作成するが，この年代記は「歴史的恐怖に満ち満ちている」[18]と記している。また，同じ頃に彼が執筆を進めていた『世界史試論』も同じような観点から書かれていて，この二つの作品には共通点があるとポモーは指摘している[19]。この年代記の主要な目的は「人権」を描写することであったが，歴史は戦争の連続であり，歴史の中の人権とはあくまでも「強者の権利」であり，民衆は長い間その人権も蹂躙されていたことを彼は主張している。この時代からすでに彼が「人権」という表現を用いて，その重要性を指摘していることは注目に値する。このように歴史を書くことによって得た教訓は，これから彼が本格的な啓蒙哲学者になり，人権のために戦うためには，大変重要な要素であったことは間違いない。

Ⅳ．人生の一大転機 － プロシア滞在

誰もが認める当代随一の劇作家にして叙事詩作家，そして歴史家，また部分的，限定的ではあったにせよ啓蒙思想家であったヴォルテールにとって，世のため人のために広く名を知られた啓蒙思想家になるための一大転機が訪れる。彼は1749年にそれまで15年近くも連れ添い，二人の愛が風化した後も，彼の精神的保護者，あるいは知的保護者の役割を果たしてくれていたデュ・シャトレ侯爵夫人を失ってしまう[1]。突然訪れた彼女の不幸な死は彼に狼狽だけでなく，虚無感や失意さえもたらした。もちろん，知的水準においてフランス18世紀一の才女と言われる彼女に取って代わる存在

は当然のことながらいるわけもなかった。当時彼の愛人となっていた姪のドゥニ夫人 Marie-Louise Denis もエミリーには遠く及ばなかった。1750年の初めには彼は極度の精神不安定に陥ってしまう[2)]。彼は精神的よりどころを失っていたのである。

こうした精神状態の中で，プロシア王フリードリッヒ2世の誘いは魅力的であった。彼はエミリーの生前からすでにヴォルテールを文学の師と仰ぎ，盛んにプロシアへ来るように誘っていた。フリードリッヒはもちろんプロシア人ではあったが，乳母や最初の家庭教師がナントの勅令によってプロシアに逃れてきたユグノー（カルヴァン派のフランス人プロテスタント）であったために，幼い頃からフランスに対して強いあこがれを抱いていた[3)]。そして，プロシア王となってからも，ドイツ語を軽蔑し，フランス語で話したり，書いたりすることを好んでいた。このようなフリードリッヒにとって，当代随一の劇作家であり，叙事詩作家でもあったヴォルテールをそばに置いて，彼から文学の手ほどきを受けることはこの上ない名誉であった。彼のフランス好みは文学だけにとどまらなかった。この啓蒙君主は自国の文化的レベルの向上を目指して，当時は文化面でプロシアよりもはるかに先行していたフランスの著名な文化人をベルリンアカデミーに迎えていた。例えば，ベルリンアカデミーの院長は，ヴォルテールとフリードリッヒとの仲違いの直接の原因となる科学者モーペルテュイであった。ヴォルテールは彼とはニュートン物理をフランスに紹介した頃からよく知った仲であった。この他にも『人間機械論 *L'Homme-machine*』(1748)や『人間植物論 *L'Homme-plante*』を著したラ・メトリ Julien Offray de La Mettrie などもプロシアに迎えられて，フリードリッヒの取り巻きを形成していた。

ヴォルテールはエミリーの死によって精神的なよりどころを失っていたのはもちろんのこと，物理的にも行き場を失っていた。まず，劇作家としては，18世紀中葉を迎えたフランスでは観客の趣味も大きく変化し，彼の劇の成功ももはや定かではなくなっていた[4)]。そのために，彼はこの嗜好の

変化を受けた新たな傾向の劇作品への挑戦を迫られていた。また，彼は王の侍従や歴史編纂官ではあったものの，ヴェルサイユも彼には決して居心地のよい場所ではなかった。というのも，フランス王ルイ15世は彼を相変わらず嫌っていて，好意の片鱗さえも決して見せず，彼への態度は冷淡この上なかったからである。彼はこうした扱いに苦しんでいた[5]。このような状況の中，彼は数週間気晴らしの旅行をするつもりで，プロシアに赴くことを決意したのである。プロシア滞在の後は，イタリアを旅行することも考えていたが，もちろん，フランスに戻ることを前提とした旅立ちであった[6]。しかしながら，プロシアとの戦争がまだ記憶に新しかったフランスの宮廷にとって，この隣国への旅行は，たとえ短期間であったとしても，敵国に赴くことを意味し，いかに彼がヴェルサイユで冷遇されているとは言え，彼はまだ宮廷に仕える身でもあり，祖国を裏切る行為[7]に等しかった。ただ，ルイ15世もその愛人のポンパドゥール夫人 Jeanne Antoinette Poisson Le Normand d'Etioles, marzuise de Pompadour も非常に冷淡ではあったがこの旅立ちに同意した[8]。しかし，これによってルイ15世のヴォルテールに対する悪感情はいっそう増加する結果となった。そのために，プロシアへの出発後は，フランスへの帰国の許可は決して下りることはなく，彼がフランスに戻ることができたのは，この時から数えて実に27年後のことであった。

彼はこういう結果になろうとは思いもせず，1750年６月26日に祖国を後にプロシアへ向かったのである。彼を乗せた馬車はウェストファリアの長い悪路をポツダム宮殿へと運んだ。ひと月ほどの苦難の旅の後，ようやく７月21日に目的地に到着した。もちろん方々で熱烈な歓迎を受けた。彼は侍従として宮廷内やベルリンへ王のお供をした。これは役目ではあったが，喜びでもあった。彼は１日に２時間王のフランス語の添削にあたったが，夜は王の取り巻きとの楽しい晩餐会が待っていた[9]。そこでは最も自由で反宗教的な会話がなされた。この自由な雰囲気の晩餐会から『哲学辞典』の発想も生まれたのである。このような雰囲気はヴォルテールにとって

「哲学者たちの天国」[10]に思えたのも無理からぬことであった。しかし，それは幻想でしかなかったことは数ヶ月後に分かる。彼は確かに王の文学の師として招待されていたが，王の侍従の職を与えられることによって，それまでの主従の関係は逆転したのである。王に仕える身分では行動や発言の自由が制約されるのは当然のことであった。それにまた，フリードリッヒの性格も幻滅に拍車をかけた。彼は非常に気難しく専制的で，すべてを掌握せねば気が済まない質であった。国事に関してもすべてを取り仕切り，王は軍の最高司令官でもあった。点検のために国中を端から端までかけずり回っていた。この姿はヴォルテールを驚かした[11]。ここにはフランスとドイツの文化的な差異があったものと思われる。民意でも差があった。国は全体的に貧しく，文化的にも遅れていた。まだ封建的な色彩が色濃いプロシアでは，ヴォルテールが抱いていた啓蒙の理想は壁にぶつかることは必至であった[12]。フリードリッヒの性格の影響は取り巻き連中にも及び，側近の何人もが辛酸をなめた挙げ句にポツダムを去って行った[13]。フランスにいる頃やポツダム到着直後に抱いていたヴォルテールの啓蒙君主フリードリッヒに対する印象は変更を余儀なくされた。

こうした中で，喜びもあった。彼よりも1ヶ月遅れでベンティンク伯爵夫人 Charlotte Sophie d'Aldenburg, comtesse de Bentinck が到着したからである。彼女は別居中の夫から領地を徹底的に奪われていた。しかし，裁判によって領地を取り戻そうにも，この領地問題は複数の国家間の領土問題に発展していた。そのために，彼女はフリードリッヒの支援を得ようとポツダムにやってきたのであった。ヴォルテールは彼女の単なる相談相手から訴訟の申立書の作成まで受け持つ弁護士の役目まで果たすようになったが，これは領土問題で「国事に口をはさむ」ことでもあり，フリードリッヒの印象を悪くした。しかも，女嫌いで有名なプロシア王は，ヴォルテールが彼女と親しくすることに嫉妬し，彼への風当たりはいっそう強くなった。それでも，彼はこの北欧風の体格と顔立ちで，知的な面では何事にもひるまない自由な精神を持ち，亡くなったエミリーともどこか共通

点があったこの女性との関係を絶たず，居心地の悪い宮廷で息苦しい思いをしていた彼にとって彼女は心情を吐露できる唯一の友となった[14]。ベスターマンは二人の書簡から，彼らはほとんど愛人関係にあったのではないかと書いている[15]。このベンティンク公爵夫人が『カンディッド』のキュネゴンドのモデルだとも言われている。

時とともに師弟の間に秋風が吹いていったが，さらに二人の関係を悪化させる事件を彼は引き起こしてしまう。1750年秋から1751年春にかけて彼はポツダムの宮廷や軍隊の御用商人であったベルリンのユダヤ人実業家ヒルヒェルと手形にまつわる不祥事だけならまだしも，裁判沙汰まで起こしてしまう。彼自身実業家の側面があり，さまざまな分野に投資し，一代で巨万の富を築いたが，この手形事件も，ヒルヒェルから提示された為替手形に対するヴォルテールからの貸し付け金の返済を巡っての悶着が事件の発端であった[16]。ヒルヒェルは宮廷の御用商人という身分からも分かるように，ユダヤ人の中では特権階級に属していたが[17]，宮廷での反ユダヤ感情は非常に根強く，ユダヤ人と訴訟沙汰になることは大変不名誉なことと見なされ，フリードリッヒからヴォルテールに宛てた書簡は激しい口調の叱責で満たされていた[18]。当然師弟の仲は険悪なものになった。到着からわずか１年後の1751年秋には「私が彼を必要とするのも長くてあと一年だろう。オレンジを搾った後は，皮を捨てるだけだ」[19]という有名な台詞を王から頂戴する羽目になる。しかし，これは宮廷から彼を追放することではなく，王にとって魅力が失せた者はただ廃人同様に宮廷で飼い殺しにすることを意味したのではないかとポモーは言っている[20]。いずれにしろ，彼は「すでに幻滅を感じているこの宮廷で，私は敵や，妬みや，嫌がらせに取り囲まれている」と語り[21]，彼が四面楚歌の状態に陥っていることをうかがわせる。

そして，師弟の仲を決裂させる事件が起きる。ベルリンアカデミー終身院長のモーペルテュイは，『宇宙試論 *Essai de cosmologie*』（1750）の中で微細運動の普遍的法則の名のもとに神の存在を方程式で証明し，宇宙の謎

の一つを解明したと大いに自慢していた。これに対して，エミリーの元物理学の家庭教師で，当時はスタットハウデルの司書とともに，オランダでは自然法の教授で，1749年にはモーペルテュイがアカデミーの準会員にも任命していたアルガロッティFrancesco Algarottiがこの運動の法則はライプニッツが書簡の中ですでに提唱していることであると1750年9月に批判を加えたのが，ことの発端であった[22]。モーペルテュイはアカデミーの院長職だけでなく，アカデミーの財政も任されたいわば「科学大臣」の役目も担い，プロシアの学問分野で絶大な権力をふるっていた。ところが，この高名な物理学者はその身分や権力にもかかわらず，この地では知的満足感を得ることができずに宗教に凝ったり，酒に溺れて，陰鬱な性格はいっそうその度合いを増していた。そのうえ，ヴォルテールの到着によって以前の輝きも失せて後景に追いやられ，二人の間に悶着が絶えなかった[23]。持論を批判されて大いに尊厳を傷つけられたモーペルテュイはアルガロッティが批判の拠り所としたライプニッツの手紙の存在の有無をめぐって執拗な反撃を開始したのである。彼は法則に関する学問的論争は避け，あくまでも手紙の有無に固執した。自らの威信を守るために彼は最高権力者の王を後ろ盾に，外交手段や行政手段さえ用いた。そして，アルガロッティが手紙を発見できなかったことを理由に，彼は「この批判はアカデミー院長を陥れるでっち上げであり，アルガロッティからはあらゆる権利を剝奪する」と1752年4月アカデミーに宣言させたのである[24]。アルガロッティも1752年8月には『世論への訴え *Appel au public*』を出版して，事の経緯を説明しながら，学問に携わる者の平等や自由を人々に訴えたのである。これに対して真っ先に反応したのがヴォルテールであった[25]。彼は匿名で『理論図書 *Bibliothèque raisonnée*』の1752年7－9月号で，その直前に出版されたモーペルテュイの著作集について論理的な弱点を突いた書評を書いたほかにも，モーペルテュイの権力乱用を糾弾したパンフレットを何遍も書いてヨーロッパ中に訴えかけたのである。ヴォルテールが大権力を相手に立ち上がったのは，アルガロッティ個人を擁護するためだけでなく，権

力から抑圧されがちな表現や思想・学問の自由，そして文士の身分の保障を広く訴えるためであった。しかし，モーペルテュイの作品集を徹底的に風刺したパンフレット集『アカキア博士の攻撃文書 *Diatribe du docteur Akakia*』は11月末の出版直後に当局に見つかって回収されてしまい，筆者は王から今後は誰に対しても批判文書などは決して書かないという趣旨の念書に署名させられたのである[26]。ところが，出版社がこの著書は儲けになるとにらんで増刷して販売したところ，発売後1日で6000冊売れたとヴォルテールは書いている[27]。この作品はヨーロッパ各地で大反響を巻き起こした。ここで重要なことは，この言論の自由に対するヴォルテールの戦いが単に一国だけにとどまらず，ロンドンでもパリでもヨーロッパ中で支持を得たことである。もちろん，このような反応は啓蒙哲学者として彼が大活躍するようになる10年後に本格化する。ヴォルテールから騙された気になったフリードリッヒは，ただちに市中に出回っているこの著作を回収させ，焚書処分を決定し，見せしめのために筆者の住居近くの広場で死刑執行人によって消却させたのである。しかし，このような焚書処分はプロシアでは大変珍しいことであった[28]。ヴォルテールは日頃院長を嫌っていたフリードリッヒを過信していた。しかし，アカデミー院長やアカデミーに対する風刺や非難は，国の高位高官や貴族を批判することであり，またそれは院長に肩を持った王への批判でもあり，王はこのような批判に対しては決して譲歩しやしないことまで想像してはいなかったのである[29]。この屈辱的な焚書処分によって大きな痛手を受けたヴォルテールは侍従の職を辞してプロシアを去ることを決心し，王に侍従の鍵と功労勲章を送り，1753年1月1日にポツダムを去ったのである。しかし，それから2ヶ月余りは，彼にも迷いがあったようで，3月11日にはポツダムに戻り王に会見を申し出ている。しかし，1753年3月26日に彼はついにプロシアを後にしたのである[30]。わずか2年半の滞在であった。しかし，フリードリッヒは辞職を受理しなかった。というのも，文学の師の才気はまだ弟子を魅了していたし[31]，彼を心底嫌ったわけではなかったからである。彼の存在は王の知的な

興味や有用性の面からも言っても不可欠であった。それにまた，ヨーロッパ中で知られた劇作家・叙事詩作家と仲違いしたともなれば，これはフリードリッヒ自身の威信に傷がつくことも必至であったからだ[32]。

ポツダムを去った失意のヴォルテールは，フランスに戻りたい気持ちもあったが，ヴェルサイユから帰国の許可が降りるかどうかも微妙であったため，知人や友人のつてを求めてドイツ各地を転々とした。まず，ライプチッヒでは，出版社で自分の作品の印刷を見守ったが，ライプチッヒ大学でフリードリッヒのフランス人取り巻きとはまったく異なるドイツのインテリに初めて接触し，感銘を受ける。自分の戦いに対する支持を得て，励みとなった[33]。次に向かったザクセンのゴータでは，ヴォルフ主義者の公爵夫人ルイーズ＝ドロテから大歓迎を受ける。長く留まるつもりはなかったが，公爵夫人にのせられて，『帝国年代史』を書くことを約束する。彼はこの歴史書の執筆のために読んだ史料の中から『カンディッド』のヒロインとなるキュネゴンドの名前を発見したのである[34]。そして，カッセルでは，ヘッセ＝カッセル方伯 landgrave Hesse-Cassel の王子がヴォルテールとの知的会話を大いに楽しんだ。この知的な王子は1766年にフェルネーにヴォルテールを訪ねた後，フリードリッヒと宗教論争を繰り広げて有名になる[35]。こうしてドイツ各地で受けた歓迎はプロシアで受けた痛手を癒してくれた。

最終地は自由都市フランクフルトであった。この都市は旅行者にとっては要衝であり，ヴォルテールも必ず通るであろうとにらんだフリードリッヒは，彼がプロシアから遠ざかる前に先手を打ったのである。王は1753年4月11日にフランクフルト駐在のプロシアの軍事顧問フライターク男爵宛てに文書を出して，ヴォルテールのフランクフルト通過の際には，所有物をつぶさに調べて，王の直筆の書簡と著作を没収するようにと命じたのである[36]。王の予想通り，作家は5月31日夜フランクフルトに到着した。事に当たったのはフライタークと帝国最高法院評定官に任命された商人のシュミットであった。両人ともヴォルテールがいかにヨーロッパ中で活躍する

作家であるかということに関してまったく知識がなかったようである[37]。これが不幸な結果をもたらした。というのも，6月1日から始まった取り調べでは彼らはヴォルテールをまったくの犯罪者として扱ったのみならず，フライタークは王の直筆がどれなのか，あるいは問題の著書がどのようなタイトルなのか皆目見当もつかずに調査に当たったために，拘留は長期間に及んだからである。それにまた，フランクフルトは自由都市であり，しかも，法的にはオーストリア帝国に属していたために，プロシアの関係者が罪人を拘留するとは法的にもとうてい許されることではなかった[38]。ただ，フライタークたちは自分たちが法律違反を犯していることは認識していたようである。しかし，専制君主が治める国家では，家臣たちは処罰を恐れて，王や国家に不利益になるようなことは最大限に避けようと努め，盲目的にロボットのように上司の命令に従ったのである。6月9日に彼を迎えにきた姪のドゥニ夫人も叔父同様に拘留を受けたのである。6月20日に彼は秘書のコリーニ Cosimo Alessandro Collini とともに逃亡を企てるが，フライタークに追いつかれて連れ戻され，最も屈辱的な待遇を受けるようになる。狭い部屋にコリーニとともに閉じこめられ，常に数人の兵士が監視した[39]。ようやく釈放が言い渡されたのは，7月6日のことであった。しかも，このひと月以上にも及ぶ拘留中の費用はすべてヴォルテール持ちとの命令が下された[40]。ヴォルテールたちは7月7日に直ちにフランクフルトを後にした。一方フリードリッヒの方は，この事件におけるフライタークの行動には行き過ぎがあったと思ってはいたが，ヴォルテールに対する長期に及ぶ屈辱的な拘留も，姪の拘留も，すべてが知らされていなかったとしらを切ったのである[41]。これが作家が偶像視していた[42]啓蒙君主の実態であった。幻想から醒めることによって，現実が見えてくる。現実を直視することによって，何かが分かり，次の飛躍が可能となってくる。

確かにこの2年半のプロシア滞在は困難と言うよりも屈辱の連続であった。しかし，この経験は彼の中で生かされ彼に決定的な変化をもたらすことになる。プロシアでも，フランクフルトでも，困難な時に彼を支えたの

は仕事であった。仕事は彼の慰みとなったが，彼の存在証明でもあった。彼はこの間に特に歴史作品を出版したり，執筆した。例えば，『帝国年代史』や『世界史試論』を書くことによって，彼は人権や人権の蹂躙ということを学んだが，自分が実体験することによって，より問題を深く考察したのではなかろうか。実際彼はフランクフルトの事件の後プロシア王に人権侵害を訴えている[43]。およそ四半世紀前も同じように2年半のイギリス滞在が彼に啓蒙哲学者として出発する大きなきっかけとなったことは先に述べた通りであるが，このドイツ滞在の経験はこれから本格的に啓蒙哲学者として飛躍する大きな契機となった。イギリス，ドイツ，いずれの滞在も，最終的にはトラブルに巻き込まれた挙げ句失意のうちにその地を去っているが，いずれも彼にとっては大きな意味を持っていた。苦い経験でさえも，それを内在化させて自らの教訓として生かすことによって，価値あるものとなすことができるのである。ヴォルテールは受けた屈辱や人権侵害を決して忘れることはなかったが，しかし，これを最大限に生かすすべを知っていた。

V．啓蒙哲学者ヴォルテール誕生

ヴォルテールはフランクフルトからマイエンスに向かった。マイエンスではハルデンベルク男爵 baron von Hardenberg 夫妻が熱烈な歓迎をして，傷ついた心を努めて和ませてくれた[1]。次はパラチナ選帝侯 Charles Théodore, Electeur palatin の招待でマンハイムに向かった。ここでは賢明な都市計画に則った幾何学的な都市建設を目の当たりにした。マンハイムの宮殿はヨーロッパで最も大きな宮殿の一つであった[2]。元来ヴォルテールは都市計画には興味を抱いていたが，このマンハイムの光景は『カンディッド』のエルドラドの都市建設の描写に想を提供したとも考えられる。また，パラチナ選帝侯夫人は『カンディッド』のトゥンダー＝テン＝トロンク男爵夫人ほどの体重ではなかったものの，金髪で色白で北欧風の

美人で，堂々たる体躯であった[3]。どこかキュネゴンドの姿も彷彿とさせるものがある。次にストラスブールに行き，姪のドゥニ夫人からフランス帰還の可能性の有無の知らせを待つが，ヴェルサイユの返事は否定的なものであった。ストラスブールは学問の街でもあり，『帝国年代史』の仕上げのためにヨーロッパ中で知られた歴史学者のシェップフリン Johann Daniel Schöpflin に会って，情報を得ることができた[4]。

そして，1753年10月21日にようやくコルマールに到着する。このコルマールはヴォルテールの伝記の中で一つの重要な段階を形成している。ここで彼はレッシング Gotthold Ephraïm Lessing の有名な小説『パメラ *Paméla*』風の同名の書簡小説を執筆する。姪にプロシアから送った書簡を送り返すように頼み，それをもとに虚構の自叙伝を書くが，そこには自己逃避，長い間暖めた復讐心，死後に向けての自己の正当性の主張，必要ならば出版も念頭に置いた攻撃文などの要因が見られる。当時の彼にとってこれは生きるよすがともなっていた[5]。プロシアやフランクフルトで受けた屈辱がいかに彼の心や自尊心を傷つけ，そしてそれはある種の復讐心にもつながっていたかが理解できる。コルマールでは後に『世界史試論』となる『世界史概論』を執筆するが，知人友人に配っていた手書き原稿が出版社の手に渡り，海賊版が出版されてしまう。出版自体によって打撃を被っただけでなく，コルマールのイエズス会士たちからはこの歴史作品が反キリスト的であると総攻撃を受けてしまう。彼らは，ヴォルテールがイエズス会の学院ルイ＝ル＝グランで教えを受けた知的なイエズス会士たちとは異なり，信心に凝り固まって，教条的であった[6]。もちろん，これも『カンディッド』のキュネゴンドの兄のイエズス会士の描写につながっていったと思われる。コルマールからは『百科全書』編集者のダランベールに執筆協力を申し出ている。コルマールではイエズス会士たちに嫌な思いをしたが，ここではまた旧知のドン・カルメ師が修道院長を務めるベネディクト会修道院で『世界史試論』の執筆や『百科全書』の項目執筆準備のためにドン・カルメ師が収集した豊富な文献を調べたが，修道院中が彼に協力

を惜しまなかった。この時彼は修道士たちとともに3週間ほど寝食をともにする共同生活を送るが，むしろ彼はこの共同生活を楽しんだようである[7]。

コルマールの後はプロンビエールで彼が「天使」と呼ぶ友人のダルジャンタル伯爵 Charles Augustin Fériol, comte d' Argental 夫妻と久しぶりに再会し，喜びを分かち合った[8]。コルマールでの共同体の経験，この友人たちとの再会はこれまで個として生きてきた彼に共同体の意義や重要性，あるいは友情の大切さをこれまで以上に認識させるきっかけになったと考えるのは穿ち過ぎであろうか。その証拠に，『カンディッド』は友人同士が共同体を組織してともに労働するシーンで終わっている。共同体の重要性の認識と同時に，啓蒙君主であると幻想を抱いたプロシア王からはむごい仕打ちを受けて裏切られ，ルイ15世からは完全に拒絶されることによって，王侯貴族に依存することのない独立した個の確立の重要性もまた認識したのではないかと思われる。そして，この二つの認識こそが，啓蒙哲学者として人々のために戦うためには重要な要素になったと思われる。

各地を転々とする放浪の旅によって精神的にも肉体的にも疲労困憊していたヴォルテールは，1754年12月12日ジュネーヴに到着する。これによってついに長い放浪の旅とも決別することができた。そしてそれはまた，それまでの王侯貴族の館を転々とする生活にもついに別れを告げることでもあった。まず，1755年2月末にローザンヌの郊外のグラン＝モンリヨンに館の賃貸契約を結ぶ。これはスイスに居を定める可能性のあるベンティンク夫人のためでもあった。そして，かねてから交渉中であったジュネーヴ郊外の城館「デリス（「快楽の館」と彼は名づけた）」の売買契約も結び，1755年3月1日に入居する。この「デリス」という名称はこの頃の彼の気持を表わしている。デリスには劇場をしつらえて劇を上演して楽しんだが，それと同時に，リヨンやパリから種を取り寄せて，庭仕事も楽しんでいる。彼の書簡にはその喜びが語られている[9]。この頃には「長老の生活」という表現が初めて彼の書簡に登場する[10]。この頃にはまたプロシアやフランク

フルトで受けた屈辱や，ライン川を南下した放浪の旅の疲れからもようやく回復し，新たな生きる意欲が出てきたのではないかと思われる。もちろん，屈辱からは完全に立ち直ったわけではなかったが，前ほどの恨みは抱いていなかった。そして，彼の中にこの「長老」という自覚が出てきたことは彼の新たな活動の展開を予告する。

しかし，デリスでの平穏な日々も長くは続かなかった。この「快楽の館」での劇の上演がジュネーヴのプロテスタントの聖職者たちの間に物議を醸しだしたからである。演劇は快楽であり，風紀を乱すものと見なされたのである。劇の上演は禁止はされなかったものの，生まじめなプロテスタントからは不評をかっていることが分かった。終の栖にするはずであったデリスももはや一時の避難場所でしかないとの考えが彼の念頭を支配するようになる[11)]。

そして，1755年11月1日リスボンに大地震が発生する。この地震は歴史にも残る未曾有の大地震であった。ちょうどその頃，彼は自分の作品全集の出版のために，イギリスの詩人ポープ Alexander Pope の最善観に彩られた『人間論 *Essay on Man*』(1733) に影響を受けた『人間詩論 *Discours en vers sur l'homme*』などを加筆訂正中であった。また，『習俗試論』では「異端審判」の項を書き終えたばかりであった。しかし，地震によって罪もない3万人の老若男女が瓦礫の下敷きとなって死ぬ大惨劇はまるで「最後の審判」が下りたような光景であり，それらの光景を想像して，彼は大きな衝撃を受けたのである。そして，彼は悪の存在について再考を迫られたのである[12)]。確かに彼は皮肉っぽい側面があり，それが強調されるあまりに，彼の人間性そのものに対して誤解を生じさせやすいが，しかし，実際の彼は人の不幸に対しては人一倍敏感であった。彼にこの感受性があったからこそ，彼ははるか彼方のリスボンの大地震の被災者たちに思いを馳せることができたのである。そして，彼はリスボンの大地震を契機に，神と人間との関係，あるいは人間存在そのものについて深い考察をしたのである。当時の彼の書簡にはリスボンの大地震についての言及が強迫観念の

ように繰り返し見られ[13]，彼が受けた衝撃がいかほどのものであったかが分かる。彼がなした考察や受けた衝撃は『自然法についての詩 *Poème sur la loi naturelle*』(1756)，『リスボンの災厄についての詩 *Poème sur le désastre de Lisbonne*』(1756) の中に十分見ることができる。特に後者の初稿は神を呪う反宗教的で激烈な内容であったために，様々な波紋を引き起こし，当時別荘を借りて住んでいた自由な雰囲気のローザンヌでさえも物議を醸したほどであった[14]。

1756年10月には7年戦争が勃発する。この戦争の中心人物はあのプロシアのフリードリッヒ2世であった。しかも，フリードリッヒが侵攻して，悲惨な戦争の舞台となったのは，1753年にプロシアの後に滞在したザクセン＝ゴータであった[15]。もちろん，屈辱的な扱いを受けたとはいえ，彼は昔の弟子の命運を固唾をのまずに見守っていた。しかし，彼が最も心配したのは，ザクセン＝ゴータ公爵夫人の運命であった。彼女は才気煥発，明朗で，知的好奇心にあふれる魅力的な女性であり，ヴォルテールは彼女に大変好感を抱き，彼女とは書簡の交換をしていた。彼は『リスボンの災厄についての詩』の草稿も彼女に捧げている。ところがこの公爵夫人は，当時のドイツのエリートの例にもれず，ライプニッツやヴォルフの最善観を固く信じていた。領土は焦土と化し，多くの死者が出ているにもかかわらず，彼女は相変わらず最善観を捨てようとはしなかった。もちろん，彼女の態度にヴォルテールは苛立ちを隠さず，書簡の中で彼女を大いに皮肉っている。彼女のこのかたくなな態度は，もちろんライプニッツの最善観をプライドゆえに最後まで捨てようとしなかったパングロスの姿の中に見ることができる。『カンディッド』の第1章から用いられている「可能な限り最善の」，「ありとあらゆる」などの表現は，この最善観を最大限に皮肉って作者が使ったものである。また，コントの中にリスボンの大地震と同時に戦争の場面が登場するのは，この7年戦争にも彼は大変な衝撃を受けたためである。戦争は地震に比べ，残虐さにおいては勝っていた。しかもそれは人為的であった。そのために，7年戦争が勃発するやいなや，あれほど衝

撃を受けたはずのリスボンの大地震はヴォルテールの関心の後景に追いやられるほどであった。それにまた，７年戦争の舞台は最善観の発祥の地であり，しかも，悲惨な戦争のさなかにも，ドイツのエリートたちは現実を直視することなく，最善観を捨てようとはしなかったことは，ヴォルテールに深い哲学的考察をさせると同時に，彼の中にまだわだかまりとして残っていたドイツに対する恨みを晴らしたい気持ちにさせたのではなかろうか。

1757年、秋も深まり、もうじき駆け足で厳しい冬がやってこようとしていた。彼の筆はしばらく前から運びを止めていた。かと言って、新たな劇作品の執筆に取り組もうとする気配も感じられなかった。『ピョートル大帝下のロシア帝国史 *Histoire de l'empire de Russie sous Pierre le Grand*』の執筆も、新たな史料の到着までは中断されていた。仕事の鬼、書くことが快楽であり、存在証明でもあった彼にとって、これは希有なことであった。だが、彼の頭の中ではさまざまな思念や想念が浮かんでは消え、消えては浮かび、交差していた。リスボンの大地震が、傲慢なイエズス会が、ジュネーヴの偏狭なプロテスタントが、『百科全書』攻撃が、無知蒙昧が、自由が、寛容が。だが、やはり７年戦争下のドイツが彼の一番の関心事であった。しかし、ローザンヌの暖かな別荘の窓の外に目をやれば、眼下にはレマン湖の広大な水面が太陽の光を浴びてきらきらと輝いていた。サヴォワへと続く湖はまるで海のようで，どこかコンスタンチノープルを思わせた。さらに遠くに目をやると，白い雪をたたえたアルプスの山々がそびえていた。窓の外に見える光景はまるでおとぎのような世界であった。しかし，一歩現実に目をやると，それは醜悪な世界であった。この落差，どのように埋めればよいのだろうか。「暇な時，少しばかり血がたぎってきたら，途端に書きたくなるのです」と彼が翌年の冬に告白しているように，さまざまな思いが行き交い，彼の気持ちは高ぶっていた。彼の筆の停止は，実は彼の一代傑作の着想と誕生のためであったのだ。こうして1757年12月から1758年１月にかけて書き始められたのが『カンディッド』であった[16)]。

1758年の秋にはスイス国境に近いフランスジュラ山脈の中にある寒村フェルネーの領地を購入する。これが彼にとっては本格的に啓蒙思想家になる大きな契機となった。自分の領地を持つことによって，彼は相対的な身の保全と精神的な安寧を手中に収めたのである。というのも，ジュネーヴ郊外でジュラ山脈の中という地理的条件は，確かにパリやヴェルサイユという文化や行政の中心地からは遠く離れてはいたが，しかしながら，この一見不利な地理的条件が彼の心理や活動にとっては有利に働いたのである。政治的には，プロテスタントが支配する厳格なジュネーヴ当局からにらまれれば，国境を越えてフェルネーに身を置くことができたし，また，フランス当局からにらまれれば，今度はスイスに身を置くことができたからである。こうした身の保全が彼の活動を勇気づけたのは言うまでもない。フェルネーの長老となってからは，それまでは王侯貴族や教会に遠慮がちに表現していた反体制的な政治的・哲学的思想を，誰にはばかることもなく表現し，啓蒙思想家としての本領を発揮できるようになったのである。

それからの彼は，フェルネー定住に前後して起こった当局による「反『百科全書』キャンペーン」に対して，喜劇作品，悲劇作品，風刺文書によって，反撃を加えていくことになる。そして，それから数年後の1762年にフランス南西部の都市トゥルーズで起ったプロテスタントの商人ジャン・カラスの冤罪事件である「カラス事件」[17]が彼にとっては啓蒙思想家として大きく飛翔する一大契機となった。この事件以降彼は「信仰の自由」や「寛容」を標榜しながら，しかし敵対者に対しては自らはほとんど「不寛容」とさえ形容できるほどの厳しい姿勢で，次々に宗教裁判に関連する事件に介入していったのである。

こうして彼は罪もなく処刑された人々の名誉回復のため，あるいは不当な裁判で死刑を宣言された被告たちの無罪を勝ち取るために，旧体制下で絶対的権力を誇る教会や高等法院を相手に勇猛果敢に戦いを挑み，「寛容の伝道者」[18]，「政治参加の作家」[19]，あるいは「啓蒙哲学のかけがえのない領袖」[20]として勇名を馳せるのである。ところが，その頃彼はもうとっくに

60才を過ぎて，やがては70才にもなろうかとしていたのである。ライバルのモンテスキュー[21]もすでにこの世を去っていた。彼は啓蒙哲学者として「遅い使命」[22]を引き受けたのである。現在に比べて格段に寿命が短かった当時[23]としては，60才と言えばもうすでに晩年か，あるいは最晩年であり，並の作家であったなら，活躍の場からも次第に遠ざり，静かに余生を過ごそうかという時期でもあった。しかし，彼は並の作家ではなかった。彼はあらゆる尺度の埒外にいようとしたし，実際そうであった[24]。彼の晩年の20数年間というものは，彼の84年の永い人生で，最も多忙であり，かつまた最も充実していた。彼は過去を振り返ることは非常にまれで，常に未来を見つめていた。彼はいわば停滞や成熟などというものを知らない，常に成長し続ける発展途上の人間であったと形容することもできるのではないだろうか。こうしてヴォルテールは啓蒙哲学者になったのであり，しかもそれは，「ごく早期からの長い間の抗しがたい練習[25]」を経た後にようやく啓蒙哲学者になったのである。

Ⅵ．啓蒙哲学者ヴォルテール

では，彼の本格的啓蒙哲学者としての活動とそれ以前の活動とではどのような違いがあるのだろうか。彼は啓蒙哲学者としてヨーロッパ中で有名になる30年ほど前の1730年代前半にはその第一歩としてイギリス滞在の経験を踏まえて「哲学的，政治的，批判的，詩的，異端的，そして辛辣な」[1]とメルヴォー氏が形容する『哲学書簡』(1734) を，次いでロックの経験論やニュートン物理の影響を受けて『形而上学概論 *Traité de métaphysique*』(1734-1735？) や『ニュートン哲学綱要 *Eléments de la philosophie de Newton*』(1737) など啓蒙思想的傾向の強い作品を著したり，あるいは匿名で多数のパンフレットを書いては，その中で反キリスト教的，反体制的な思想を展開していた。もちろん，1750年代のプロシア時代の言論や思考の自由を訴えた著作はすでに述べた通りである。しかしながら，1760年以

前に彼が書いた作品と，それ以降の特に1762年に「カラス事件」に介入してから，「卑劣な奴を粉砕せよ Ecraser l'Infâme!」のスローガンのもとに，矢継ぎ早に発表する教会や高等法院批判のイデオロギー色濃厚なパンフレット類，あるいは『オネットムの教理問答書 *Catéchisme de l'honnête homme*』（1762）や『寛容論 *Traité sur la Tolérance*』（1762）などの作品とを比較するならば，その差は歴然としている。もちろん教会はいつも彼の天敵ではあった。それでも1760年以前に書かれた作品は権力と直接対峙するという類のものではなく，比較的穏健であったと言うことができるのではないだろうか。もちろんそれも比較の問題であり，彼が生来反権力的思想の持ち主であることに変わりはなく，常に当局の監視下にあったことはすでに述べた通りである。当然のことながら，『カンディッド』の中にも彼独自の鋭い体制批判の思想が見え隠れしている。彼の哲学作品については，これも枚挙に暇がないほどに多いが，反教会，反宗教，反体制の色彩の濃い作品としては，上記の作品に加えて，『携帯哲学辞典』（以下『哲学辞典』と省略），『無知な哲学者 *Le philosophe ignorant*』（1766），『ボーリングブルック卿の重要な検討，あるいは狂信の墓 *Examen important de milord Bolingbroke ou le tombeau du fanatisme*』（1767），『ブーランヴィリエ伯爵の昼食 *Le Dîner du comte de Boulainvilliers*』（1767），『ついに解明された聖書 *La Bible enfin expliquée*』（1776），『百科全書に関する疑問 *Questions sur l'Encyclopédie*』（1770-1772）などをあげることができるだろう。『哲学辞典』は，「辞典」と名打っていても，実際には「反辞典」[2]とでも形容できる内容を持つものである。この辞典の中で作者は項目について長々と博学や衒学的知識を披露することはなく，あるテーマに沿ってむしろ独自の思想を首尾一貫性を持って簡潔明快に展開している。つまりこれは，束縛を嫌い自由に書くことを好むヴォルテールが，自ら買って出たとはいえ，『百科全書』の執筆においてはあまりにも制約が多く，思い通りに書けずに反発を覚え，自分流の「辞書」を編纂しようと思ったのが執筆の直接の原因であった[3]。従って，この辞書の中で彼は誰にも気兼ねする

ことなく，自分の気持ちの赴くままに筆を運んでいる。そのために，この作品の中には彼の思想のエッセンスや彼のよさがぎっしり詰まっていると言うことができるだろう。この辞書は1764年の出版当時には118項目しかなかったが，その後加筆訂正が加えられて，最終的には項目数も437と飛躍的に増え彼の作品群の中で最も長い『百科全書に関する疑問』となった。これは名前からしても，ヴォルテールの啓蒙思想の『百科全書』であると言うこともできるだろう。メルヴォー氏が言うように，彼はこのようにある項目ごとに簡潔明快に，しかし含蓄深く述べる手法に特に優れていた[4)]。これはまた，長さこそ短いが，行間には溢れんばかりのさまざまな要素のエッセンスがぎっしり詰まった哲学コントの手法と共通部分があるように思われる。また，『哲学書簡』の第一信や第二信のクウェーカー教徒とフランス人の対話や，『哲学辞典』の中の「平等」，「主人」，「拷問」などの項目には，コントと見まがわんばかりの箇所も見られ，ヴォルテールが「語り手」としての才能にも非常に優れていることを表わしている[4)]。

彼は上にあげたような数多くの哲学作品の中で自らの啓蒙思想を述べてはいたが，しかし，彼の場合，他の哲学者とまったく異なり，思想体系や哲学体系というものを警戒したり嫌悪して，彼独自の哲学思想体系を構築することは決してなかった。というのも，彼はあまりにも聡明であったがために，思想体系や哲学体系というものが机上の空論でしかなく，実現不可能だと見抜くことができる慧眼の持ち主であり，現実主義者であったからだ。従って，彼が啓蒙哲学者として実際になそうとしたことは，人々の内なる理性を覚醒することによって，人々を支配している偏見を打破し，蒙昧から解放して，より高次元の社会を構築することであった。このような彼の体系に対する考えは『カンディッド』の鋭いライプニッツ批判の中に見事に現れている。ただ，彼のこのような姿勢に対して，彼の哲学思想にはまとまりや，哲学そのものが欠落しているという攻撃が往々にしてなされるが，寛容論にせよ，人権にせよ，あるいは表現や思想の自由にせよ，彼の思想自体が現在でもまったく新鮮みを失わず，十分に通用することを

考えれば，彼の先見の明こそを評価すべきではなかろうか。

Ⅶ．コント作家ヴォルテール

それでは，「ヴォルテールの代表作は哲学コント『カンディッド』である」という命題は果たして正しいのだろうか。ヴォルテールと哲学コントの関連性について考察してみよう。というのも，まず第一に，すでに述べたように，『カンディッド』執筆当時はすでに正統派の劇作家や叙事詩作家として名を成し，また歴史家として，また『カンディッド』執筆時は限定的であったとはいえ啓蒙哲学者としてもヨーロッパ中に知られていたヴォルテールという作家の代表作が何故哲学コントの『カンディッド』であるかということ自体納得がいかないうえに，後世の我々にとっても彼は劇作家や叙事詩作家というよりもむしろ哲学コント作家としての印象が強いからである。いったい何故2世紀という時を経るに従ってこのような齟齬が生じたのであろうか。それにまた，何故に彼は哲学コントなるものをしたためたのであろうか，疑問は増すばかりである。

それではまず，ヴォルテールが何故哲学コントの執筆にいたったかの経緯について少し述べてみよう。ヴォルテールという作家は，すでに述べたように，作品ジャンルの多様性に加えて，フランス文学史上一二を争う多作の作家[1)]としても知られている。そのために，後生の我々にとっては馴染み深い『ミクロメガス *Micromégas*』（1752年の出版であるが，1738年頃に執筆したものと推定されている[2)]），『ザディーグ *Zadig*』（1747），『カンディッド』，『ランジェニュ *L'Ingénu*』（1767）を代表作とする哲学コントや小説は30編近くを数えるが，この数でさえも彼の厖大な作品群の中ではほんの一部分を占めるに過ぎない。しかも，コント作家としての活動にしても，若い頃に散文や韻文で書いた数編のコント[3)]を除けば，彼が本格的に散文で哲学コントを書き始めたのは40才過ぎてのことであり，最初の哲学コントの出版が『ザディーグ』の1747年であることを考えれば，これもいわ

ば「遅咲きのコント作家」とヴォルテールを形容することも可能であろう。そのうえ，現在ではコントや小説は立派な文学ジャンルとして確立されているためにこれらのジャンルを書くこと自体何ら問題を惹起しないが，小説が流行する18世紀後半ならまだしも，18世紀前半の当時にはこれらの文学形体はまだジャンルとしては十分に確立されておらず，コントや小説を書くこと自体が彼にとって大きな波紋を引き起こしたのである。というのも，名声を欲しいままにしていた正統派の韻文作家たるものが，韻文に比べると現在では想像もできないほど低く見られていた散文の，しかも自他ともに認める大衆的二流ジャンル[4]のコントごとき[5]に手を染めて，挙げ句の果てにはそれを書いて出版すること自体が当時としては常識的には考えられなかったからである。このことを証明するかのように，彼自身も当時のジャンルに対する伝統的な考えを踏襲していて，半ば自嘲的に「真の作家たるものは小説類を軽蔑する」[6] と語っている。

こうした状況の中で，いったい何故彼は前言を翻してまで，あるいは自己矛盾を犯してまで哲学コントなるものを書こうとしたのであろうか。最初は周囲にいる友人や知人たちを愉快にさせるために即興的に作ったのがきっかけであったが，次第にその創作に喜びを見いだし，自らの楽しみでも書くようになったのである。それでは，名を成した一流の韻文作家たるものが，何故にそうした楽しみを大衆的な二流の散文ジャンルに求たのであろうか。現在では，ヴォルテールと言えば，自由闊達，陽気で開放的な「ある種のフランス的エスプリ」[7] を象徴する作家として有名であるが，当時はまだ「フランス的エスプリの作家ヴォルテール」などという謳い文句は当然のことながら存在していなかったし，むしろそのような開放的なエスプリというものは，重厚な筆致が問われる悲劇作家や叙事詩作家の才能とは相入れないものと思われていた。重厚かつ優雅な韻文で文章を綴ることができるというのが，正統派の大作家たる所以でもあった。ところが，彼の才気は，そのような正当派が求める筆致とは裏腹に，生来軽妙洒脱にできていたのである。確かに彼は流麗な韻文の文体で悲劇や叙事詩，ある

いは叙情詩を書いてはいたが，それは彼本来の才気を活かしたものではなく，むしろそれは彼の才気や精神を抑圧するものとして機能していたのである。彼の自由で軽やかな精神は，厳格な規則に拘束される韻文でがんじがらめとなり，無理を強いられていたのである。彼は本質的に反逆児であり，彼の精神は束縛を嫌っていたのである。それにまた，生来反体制派にして自由闊達な批判精神の持ち主であった彼は，有名作家には自らが望んでなったとはいえ，有名人という存在それ自体がまた彼のストレスとなっていたのである。厳格な規則に則り自分の精神に反して書くストレスと，彼の性格や作家活動が招来するさまざまなストレス，この双方からのストレスを緩和するために彼には密かな楽しみや気晴らしが必要だったのである。そして，受けたストレスの数量と比例するかのように，彼の夢想はコントの中へと飛翔して行ったのである。彼の幸福は空想の世界へと逃れることであった[8]。コントを書くことによって彼の天性の才能は解き放たれたのである[9]。気分や才気の赴くままに，彼の本領を発揮して書いたのが，実は哲学コントであったのだ。

そして時は経ち，散文も韻文に勝るとも劣らないほど格が上った。散文は格上の韻文よりもむしろ愛され読まれるようになった。そして，散文で書かれた小説やコントも一つのりっぱな文学ジャンルとして広く認知されるようになったのである。もちろんここには文学や学問全般の大衆化も大きく影響しているだろう。これらの散文ジャンルに完全に慣れ親しんだ後生の我々は，厳格な規則に則って書かれたヴォルテールの韻文にはなかなか親しむことができず，むしろ彼のエスプリがたっぷりと効いて暖かな血が通った哲学コントの中に彼らしさや彼のよさを見いだして，18世紀とはまったく異なる評価を彼や彼の作品に下したのである。それはある意味でヴォルテールを再評価することでもあった。時が彼のよさを見いだしたのである。

Ⅷ．結論

30数編あるヴォルテールの哲学コントの中でも，いったい何故『カンディッド』が彼の代表作と見なされるようになったのであろうか。18世紀の有名な文芸批評家のグリム Frédéric Melchior von Grimm は『カンディッド』について，「恐らくこれから2000年後の賢明な批評家は，『カンディッド』を書いた時作者は25才でしかなかったと言うだろう」[1] と彼の印象を語った。確かに，主人公カンディッドの年齢や彼の未熟な言動だけで判断するならば，グリムのような印象を受けやすいのも事実である。しかし，すでに述べたように，ヴォルテールという作家は非常に誤解されやすい作家である。従って，彼の作品を理解するためには，グリムのような必ずしも彼に好意的とは思われない批評家や研究者のコメントだけを参考にしながら，ある作品だけ，あるいはある作品のほんの一部分だけを取り出して，それだけを読むという作業は避けるべきである。というのも，ヴォルテールの場合，作品はそれ自体独立して存在することは決してなく，作品の中には必ず彼を取り巻く状況や，彼のその時々の思想や心理が濃厚に見られるからである。それに，特に哲学コントの場合は，受けたストレスの憂さを晴らすのが主たる目的であったことから考えると，ウーヴェル Jacques van den Heuvel がその優れた研究『コントの中のヴォルテール *Voltaire dans ses contes*』で指摘しているように，彼を取り巻く背景や彼の心理，また彼のその時々の思想傾向を理解しなければ作品が意味することも十分には理解できないのではなかろうか。これらの要素を念頭に置きながら，純粋に作品を読みこなして行かなければ，その作品の本当のよさを味わうことはできないのである。従って，我々が真に『カンディッド』を理解したいと願うならば，この作品が織りなす文章の一字一句を丹念に読み解いて行く作業が必要となってくる。そうすることによって，グリムが語った表層的な理解とはまったく裏腹に，この作品の中には若い作家にはとうてい真似などできようはずもない躊躇逡巡，試行錯誤を繰り返した

彼の哲学的思索，波乱に富む人生において到達しえた彼独自の人生観，長い年月をかけて渉猟した書物や資料によって獲得したありとあらゆる領域に関する厖大な知識が丹念に織り込まれていることが透かし模様のごとくに見えてくるのである。これは彼が1758年までの60余年の人生において，中でも特にプロシアからフェルネーに定住するまでのおよそ8年の間に経験したあらゆる事象や想念の凝縮[2]であり，錬金術的な内面吐露の一形態であるとでも言うことができるほどの作品なのである。このような濃厚な内容であるがゆえに，先にも述べたように，『カンディッド』を真に理解するためには，解説書が必要となってくるのである。

そして，このコントはそれまでの彼の人生の一区切りを示す一種の重要な収支決算書であったと言うこともできるのである。というのも，奇妙なことに，彼は人生の転機の節目節目で哲学コントを書く傾向にあったからだ。例えば，『ザディーグ』はヴェルサイユの宮廷人としての役割や立場からの決別を宣言する書であり，『ランジェニュ』は死を克服した作者の新たな人生への決意の書でもあった[3]。彼は人生の転機に差しかかった時に，哲学コントを書くことによって自己を客観的に点検見直し，ある意味で清算し，それまでの人生に一区切りをつけて，新たな気分で次の人生に踏み出す決意をした側面があったからだ。実際，この傾向を証明するように，『カンディッド』執筆の後には，民衆の幸福や名誉回復のために啓蒙哲学者として本格的に活動を開始するという，新たな，そして高次元での人生の展開があったことはすでに述べた通りである。彼にとって哲学コントを書く行為は秘密裏に行う私的な快楽や余技でしかなかったが，彼の精神や活動にとっては非常に重要な役割を果たしたのではないかと思われる。

また，『カンディッド』は彼の哲学コントの中でも一つの分岐点をなす作品であるように思われる。というのも，『カンディッド』を境にして，それまでに彼が書いた哲学コントとこれ以降に書くコントとを比較するならば，微妙な点で異なっているからである。つまり，それまでのコントの主人公たちは，作者が自分自身を対象化しつつ，時には自らをも揶揄しつつ，自

分のあるべき姿を模索しながら書いている側面があるからだ。それはつまり，ザディーグ≒ヴォルテール，メムノン≒ヴォルテール，カンディッド≒ヴォルテールのような図式が成り立つほどに，主人公たちは彼の一分身とも言えるものであった。ところが，『カンディッド』以降の哲学コントとなると，不思議なことに主人公はもはや彼の分身ではなくなり，彼とは世代も異なる若いまったく別の存在となっている。このことから考えると，『カンディッド』を執筆することによって彼は何かを脱皮したような，あるいはそれまでの自分とある意味で決別した面があるように思われる。確かに，実際の生活でも，彼は個として王侯貴族などに依存する立場と決別し，まったき個として身分的にも金銭的にも完全に独立し，今度はその独立した個を，フェルネーの長老として，あるいは啓蒙思想家たちの領袖として自覚し，共同体の人々や世の中の人々のために活かすことになるからである。それは主人公のカンディッドがトゥンダー＝テン＝トロンク城から追放され，世界各地をさまよった後に，最後は共同体のためにその一員として自分を活かしながら労働する姿がそれを予告している。こういう意味で，『カンディッド』はヴォルテールにとって，それまで生きてきた人生の収束点であり出発点でもあったと同時に，文学的に見ても一つの大きな分岐点であったと言うことができるのではないだろうか。

以上見てきたように，『カンディッド』は彼の人生においても，また文学的側面から見ても，一つの画期的な作品であるが，彼の啓蒙哲学者としての活動という面から見ても，すでに述べたように，この作品は大きな意味を持っている。というのも，この作品を契機として彼は啓蒙哲学者としての本格的活動を開始するからである。もちろん，彼がどの時点から明確にフランス社会全般に啓蒙哲学者として認識されるようになったかは確かに重要な問題ではあり，『百科全書』執筆当時から，あるいはもっとそれ以前から彼を啓蒙哲学者の範疇に入れることも十分に可能であろう。しかしながら，啓蒙という言葉は，元来世間一般の蒙昧を解く，あるいは，民衆の偏見を打破し意識の中に改革を起こす[4]ということを意味することから考

えるならば，啓蒙哲学者の活動を知識階級や社交界に限定せずに広く社会一般との関連性から捉えるのが本来の意味に即しているのではなかろうか。従って，本論では，ヴォルテールが1755年にジュネーヴに定着し，そして，1758年にフェルネーやトゥルネーを購入し，積極的に民衆とかかわろうとする彼の姿から判断して，この時期を彼の啓蒙哲学者としての本格的活動の開始とし，特に「カラス事件」介入以降の彼の活躍を本格的啓蒙哲学者の活動と位置づけたい。

このような作品の裏に潜む含意を理解せずして，作品の本当の面白さを理解することはできないのではなかろうか。もちろん18世紀の読者は大劇作家や大叙事詩作家のヴォルテールが哲学コントを書いたということで多少戸惑いを覚えたことも確かであろう。しかし，それと同時に，同時代を生きる者としては背景や事情をより身近に感じて理解できただけよけいに『カンディッド』の面白さを理解することもできたであろう。時が厖大な数の彼の作品群から哲学コント『カンディッド』の中に彼本来の良さを発見したのであるが，残念ながらそれ以外の事実を捨象してしまったがために，現代の読者はこの作品の背景となっているものが十分理解できずに，グリムのような表面的な解釈で終わる可能性も大いにある。そして，「ヴォルテールはフランス18世紀の啓蒙時代を代表する哲学者であり，その代表作は『カンディッド』である」という短絡的になされた定義を何の疑いもなく鵜呑みにしてしまう危険性も大いにある。

哲学コント『カンディッド』は刊行されるやいなや，韻文の大作家が書いた軽妙洒脱なエスプリに富む作品ということで大いに話題となった。この評判は単にフランスだけにとどまらず，ヨーロッパ中で話題となり，すぐにベストセラーになった[5]。当時の知的ヨーロッパ世界は今のように国境はなく，話題が話題を呼んでいった。確かに読者はこの作品を面白おかしく読むことができた。彼の才気は冴えに冴えわたっていた。もちろん，哲学コントの名の通り，このコントの中には彼独自の哲学思想が随所に見受けられた。それだけではない。すでに述べたように，ヴォルテールはそ

の多才ぶりを発揮して多様なジャンルにまたがる膨大な作品群を著したが，これらの作品群はジャンル別にそれぞれ別個に存在するわけではなく，各々の作品はジャンルを越えて有機的に結びつき，お互いに呼応し合っていた。こうしたことを特色とする彼の数多ある作品の中でも特に『カンディッド』が最も彼の作品らしい作品と言われ，その代表作と見なされるのは，実はこの作品が他の作品に比べても彼本来の才気が最も反映されているばかりでなく，文章の隅々に多様なジャンルの融合が最も感じ取られるからである。

スタンダール Henri Beyle, dit Stendhal は「『カンディッド』は2200年には退屈な代物になっているだろう」[6]と予言した。しかしながら，スタンダールの発言からはや200年近くが経っているが，現在でもなお『カンディッド』の面白さは失せることなく，十分に我々を楽しませてくれる。それは，ヴォルテールという作家が自ら歩んだ紆余曲折の人生において，さまざまな経験を経ることによって初めて理解しえたある意味で極端な形ではあっても人間の本質というものを作品の中で巧みに描写しているからではないだろうか。そうだとすれば，「太陽のもと，何ら新しきものなし」という諺のごとく，人間の本質というものは，時代を経ても，さほど変化することもないということであり，哲学コント『カンディッド』は，これから200年後の西暦2200年になっても，十分に未来の読者を楽しませてくれるのではないだろうか。

注釈

I．序章

1）「啓蒙」という意味で使われている Lumières（「啓蒙」という意味では常に複数形で用いられる）は，一般的に「光，光明」を意味するが，単数では「（神の）超自然的真理」という意味もあった。しかしながら，18世紀になると，反教会という思想的潮流の中で，神の超越性は否定され，それに代わってこの語は「人間の理性」という意味で使われ始めた。

2）André Magnan, *Voltaire, Candide ou l'Optimisme,* Paris, Presses Universitaires

de France, 1995, p. 9.

3）Jean Goldzink, *Voltaire*, Paris, Hachette, 1994, p. 5. バカロレアの国語の口頭試験の問題では，18世紀の作家の作品の中では特に『カンディッド』に関して問題が出される確率は高いようである（Ibid., p. 49）。確かに学生街の書店の店頭にはバカロレアの受験用にありとあらゆる種類の『カンディッド』の解説書が並んでいる。筆者の手元にある解説書だけを数えてみても6冊の解説書がある。これはいかに『カンディッド』がバカロレアの受験生の必読書であるかを示している。ところが，ジャン・サレイユ Jean Sareil の数量的かつ綿密な研究によると，この傾向はたかだかここ30数年来のものでしかない。つまり，これは1968年のいわゆる五月革命と呼ばれる意識革命以降の比較的新しい傾向でしかないのである。ヴォルテールが啓蒙思想家としてフランス革命勃発に大きな影響力を及ぼしたのは否めない事実である。ところが，19世紀になると帝政，王政復古を経たフランスは反動的，反革命的になり，フランス革命で一時権力の座から失墜した教会の影響力も再び強まっていった。それにつれて，当時はまだ非宗教化されていなかった教育機関における宗教色も次第に濃くなっていった。それを背景に，革命に寄与したヴォルテールに対する評価は一転し，彼は世の中の秩序を混乱させた思想家の一人としてむしろ弾劾され始めたのである。もちろん，このような時代背景をもとにして，知識人たちの間にもヴォルテールを批判的に見る人たちが数多く現れた。そして，これらの知識人たちによって書かれた学校の教科書の中では，反教会を旗印に掲げたヴォルテールは，作家として残した業績は衆人認めるものがあり否定することができずにそれ相応に評価されはしたが，その反対に，性格上の欠点をあげつらわれたりして，全体的に見るとむしろ批判的に評価されたのである。そのために，ことヴォルテールに関しては，非常に矛盾した評価がなされたのである。19世紀から20世紀にかけてのフランス文学史の大家であったファゲ Emile Faguet やランソン Gustave Lanson のみならず，フランス18世紀文学史の大家のモルネ Daniel Mornet でさえも，19世紀に教育を受けたがために，これらの狡猾で組織的とも言える教会側から仕掛けられたサレイユが言う「反ヴォルテール宣伝活動（propagande anti-voltairienne）」の影響を多かれ少なかれ無意識的に受けたのである。その結果，ヴォルテールの有名な研究者たちでさえも知らず知らずのうちにこの罠にはまっていたのである。そして，この「反ヴォルテール宣伝活動」の傾向は驚くべきことに1960年代まで続いたのである（Voir Jean Sareil, "Le massacre de Voltaire dans les manuels scolaires", *Studies on Voltaire and Eighteenth century,* Vol. 212, Oxford, The Voltaire Foundation at the Taylor Institution, 1982）. サレイユが19世紀から20世紀にかけておよそ150年間に出版された400冊もの高等学校などの教科書を調査した結果，上記の結論を得たのであるが，彼によれば，この400冊中のわずか5，6冊だけがヴォルテールに好意的であったそうである。

4）André Magnan, *Voltaire, Candide ou l'Optimisme,* p. 9.

5）ヴォルテール全集としては最も新しいオックスフォード版（Voltaire Foundation）は，1970年に刊行が開始され現在もまだ刊行中である。毎年数巻ずつが出版されているが，20世紀から21世紀へと世紀を越えても，刊行終了となるのはずっと後という遠大な計画である。すべてが揃えば全部で160巻の膨大な全集になることが予定されている（René Pomeau, "Si François-Marie Arouet n'avait pas vécu...", *Visage de Voltaire,* Bruxelles, Académie royale de langue et de littérature françaises, 1994, p. 15）。

6）ヴォルテールの84年にわたる長い人生と作家活動，作品との密接な関係を詳しく紹介した『ヴォルテールとその時代』全５巻が，ルネ・ポモーを中心に世界中のヴォルテール研究者を結集して長い年月をかけて完成され，1985年からオックスフォード大学テーラー研究所のヴォルテール財団から次々に出版された。これらの長い伝記からは，ヴォルテールがいかに多才であり，その波乱に富んだ長い人生の中で，いかに数多くの作品を残したかが分かる。この全５巻は以下に示す通りである。*Voltaire en son temps* ：Ⅰ：René Pomeau, *D'Arouet à Voltaire (1694-1734)*, Oxford, Voltaire Foundation, 1985；Ⅱ：René Vaillot, *Avec Mme Du Châtelet (1734-1749)*, 1988；Ⅲ：René Pomeau et Christiane Mervaud, *De la Cour au jardin (1750-1759)*, 1991；Ⅳ：René Pomeau, *"Ecraser l'Infâme" (1759-1770)*, 1994；Ⅴ：René Pomeau, *On a voulu l'enterrer (1770-1791)*, 1994. これらの一連の伝記はこの論文を書くにあたり大変参考になった。しかしながら，フランス18世紀文学研究に一生涯を捧げ，特にヴォルテール研究においては彼の右に出る者はいないと言われるほどに，世界のヴォルテール研究の中心的存在であったルネ・ポモー氏は2000年２月26日にヴォルテールの84才に劣ること１年の83才でその生涯を閉じられた。死の直前まで実に精力的に研究されていたそのお姿が今でも脳裏に浮かんでくる。ポモー氏は筆者の恩師でもあり，東洋から来たヴォルテール研究者の端くれにもいつも時間を割いて誠実に接してくれた。彼から直に多くのことを学び取ることができたことは筆者にとって最大の収穫であり喜びでもあった。心から冥福を祈りたい。

7）Christiane Mervaud, *Voltaire en toutes lettres,* Paris, Bordas, 1991, p. 3.

8）例えば D.J. Adams, *La Femme dans les contes et les romans de Voltaire,* Paris, A.-G. Nizet, 1974の中で，アダムスはヴォルテールのコントや小説における女性像の優れた分析を行っているが，これらの女性像をヴォルテールが抱いていた女性観であると考えるならば，大きな間違いを犯すことになるだろう。彼の哲学コントや小説では，人間や女性の醜悪な部分が，拡大鏡で見るように誇張され，それらが風刺の対象になっているが，これはあくまでも風刺することが目的で誇張されているのあり，実像として捉えることはできないのである。

9）拙書，*La Féminité dans l'Œuvre de Voltaire,* Thèse de Doctorat présentée à

l'Université de Paris IV- Sorbonne, 1993を参照。この作品において筆者は，ヴォルテールの書簡，歴史作品，哲学作品，文学作品などできるだけ多くの作品の中の女性像を分析することによって，ヴォルテールの女性観を抽出することを試みた。この分析の結果，ヴォルテールの女性観は，彼の哲学コントや小説の女性像とはまったく異なり，どちらかと言えば，女性を高く評価していることが明確になった。

10) Christiane Mervaud, *Voltaire en toutes lettres,* p. 8.

II．劇作家，叙事詩作家ヴォルテール

1) René Pomeau, *Voltaire*, Ecrivains de toujours, Paris, Editions du Seuil, 1983, p.36. モンテスキューの『ペルシャ人の手紙』はペルシャ人の目を通して見たフランス批判であるが，これを同様の主旨で書かれたイギリスとの比較によるフランス批判の作品の『哲学書間』と比べると，『ペルシャ人の手紙』の方が14年も先立って書かれたにもかかわらず，文体や精神の面から見ても『哲学書間』よりも斬新であるとポモーは指摘している。この点に関してはヴォルテール自身も認識していたようで，彼はモンテスキューに対してはいつもライバル意識を持って厳しい評価を下していた。1748年に刊行された『法の精神』に対しても，『哲学辞典』などで度々批判的に言及している。

2) Christiane Mervaud, *Voltaire en toutes lettres*, p. 114.

3) Jean Ehrard, *L'idée de la nature en France dans la première moitié du XVIIIe siècle,* Paris, Albin Michel, 1994, p. 787.

4) René Pomeau et Jean Ehrard, *Littérature française, 5. De Fénelon à Voltaire,* Paris, Arthaud, 1983, pp. 346-347. この点に関してはメルヴォー氏もポモーとまったく同意見で，作家ヴォルテールを端的に表すことの難しさを語っている (Christiane Mervaud, *Voltaire en toutes lettres,* pp. 3-5)。

5) 確かに彼はフランス17世紀の古典劇作家のコルネイユやラシーヌの後継者と目され当代一の劇作家ではあった。しかしながら，ラシーヌを手本にしてその文体を真似たが，実際のところ，ヴォルテール自身も認めるように，それは出来のよい「小学生の文体」程度でしかなかった。というのも，彼の場合，当時ではヨーロッパ一とも言われるほどの知性の持ち主ではあったが，この知性は，巧みに人の模倣をすることはできても，独自のものを創作することができるような独創的知性ではなかったからである。また，彼の場合はいかんせん，理性が感性を上回っていたために，彼の劇においても，確かに情動表現はあるものの，全体的には感情の自然な表出は抑制されていて，冷たい印象を与える結果となった（René Pomeau, *Voltaire,* pp. 60-61)。

6) René Pomeau, *D'Arouet à Voltaire,* p. 121.

7) Abdeljelil Karoui, *La Dramaturgie de Voltaire,* Tunis, Publications de la

Faculté des Lettres de la Manouba, 1992, p. 47.

8）René Pomeau et Jean Ehrard, *Littérature française, 5. De Fénelon à Voltaire,* p. 352.『ラ・アンリアッド』は出版されるやいなやたちまち傑作と見なされて，ヴォルテールの生前には60あまりの判が重ねられ，彼の死後も1789年から1830年までの間に67の判が出たほどで，これは当時としては異例のことであった。このように，ヴォルテールは若い頃から「フランスのウェルギリウス」の名をほしいままにしていた。従って，当時の読者にとってヴォルテールと言えば，もちろん劇作家としても有名であったが，「ラ・アンリアッドの作者」というイメージも強かったのである。

9）René Pomeau, "Si François-Marie Arouet n'avait pas vécu...", p. 13. 彼の劇はヨーロッパ中で上演され，劇作家ヴォルテールの名はヨーロッパ中に知れ渡り，彼と親交を持ちたいと望んだ諸侯・貴族は多かった。その中でも特にプロシアのフリードリッヒ２世とロシアのエカテリーナ２世は有名である。ヴォルテールは劇作家だけでなく次第に啓蒙哲学者としての道を歩み始めるが，それとともに1758年に移り住んだフェルネーの城館はヨーロッパの進歩的知識人の交流の場となり，彼はヨーロッパの「啓蒙運動の強力な主導者」となったのである。

10）René Pomeau, "Si François-Marie Arouez n'avait pas vécu...", p. 12. 1770年当時のヴォルテール作の50余編の劇作品のうち，16作品がまだ上演され続けていたほどである。また，アンリ・ラグラーヴによると，コメディ・フランセーズで上演されたヴォルテール劇の観客総数は200万人に上るという（René Pomeau, *On a voulu l'enterrer,* pp. 153-154）。

11）Diderot, *Le Neveu de Rameau, Œuvres,* éd. André Billy, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1978, pp. 401-403.

12）Jacques Chouillet, "Etre Voltaire ou rien ： réflexion sur le voltairianisme de Diderot", *Studies on Voltaire and the Eighteenth century,* Vol. 185, Oxford, The Voltaire Foundation, 1980, p. 226.

13）René Pomeau, "Si François-Marie Arouet n'avait pas vécu...", p. 12.

14）ヴォルテールは劇作家や叙事詩作家として国際的に名をなしていたが，例えばイタリアではヴォルテールは知識階級からは主として伝統的古典文学の継承者と見られていた。そのために彼の多くの劇作品がイタリア語に訳されて出版されていた。ところが，『哲学書簡』が翻訳されて遅ればせながら出版されるやいなや，彼は危険思想家と見なされるようになった。

15）Christiane Mervaud, *Voltaire en toutes lettres,* p. 71.

16）Ronald S. Ridgway, "La propagande philosophique dans les tragédies de Voltaire", *Studies on Voltaire and the Eighteenth century,* Vol. 15, Genève, Institut et Musée Voltaire, 1961.

17）『百科全書』の企画，執筆，編集，出版に関しては次の作品を参照のこと：Jean

Haechler, *L'Encyclopédie, Les combats et les hommes,* Paris, Les Belles Lettres, 1998.

18) René Pomeau et Christiane Mervaux, *De la Cour au jardin,* pp. 207-208.

19) Ibid., pp. 83-94. この『携帯哲学辞典』の発想自体は彼がポツダムの宮廷でフリードリッヒ2世とその取り巻きとともに「ベールの精神で辞典を作ろう」といった会話から得たものである。辞典に対する考え方の違いはあったものの，ポツダム滞在中にも彼はダランベールたちの『百科全書』の編集出版に対して賛辞を惜しまなかった。ただ，この時点で執筆協力を申し出なかったのは，ポツダムには執筆に必要な文献資料が決定的に不足していたこともその大きな原因であったと考えられる。

20) この作品の執筆年は明確ではないが，ウェイドによれば，シレー時代の1749年頃にさかのぼると言う。Voir, I. O. Wade, *Voltaire and Madame Du Châtelet, an essay on the intellectual activity at Cirey,* Princeton, 1941, p. 149. 確かに，聖書を詳細に読み，その矛盾点を指摘し批判した内容からすれば，これはヴォルテールがシレーでデュ・シャトレ侯爵夫人と聖書の内容を検討した結果が一つの形になったものと思われる。

21) René Pomeau et Christiane Mervaud, *De la cour au jardin,* p. 15.

III. 歴史家ヴォルテール

1) Brailsford, *Voltaire,* H.U.L., p. 84, 引用，安斎和夫，「歴史家ヴォルテール」，『思想』，1978年7月号，特集「ルソー／ヴォルテール」，岩波書店，p. 142.

2) René Pomeau, *D'Arouet à Voltaire,* pp. 45-46.

3) Ibid. p. 46.

4) Ibid., p. 45.

5) Ibid., pp. 65-66.

6) Ibid., p. 243.

7) 安斎和夫，「歴史家ヴォルテール」，p. 143.

8) Voltaire, *Correspondance I,* Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1977, p. 927, Lettre à Frédéric, Prince héritier de Prusse, Vers le 1er juin 1937.

9) Voltaire, *Remarque sur l'histoire, Œuvres historiques,* Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1978, p. 43.

10) Voltaire, *Nouvelles considérations sur l'hisoire, Œuvres historiques,* p. 47.

11) Christiane Mervaud, *Voltaire en toutes lettres,* p. 106.

12) Charles Rihs, *Voltaire, Recherches sur les origines du Matérialisme Historique,* Genève - Librairie Slatkine/ Paris-Librairie Champion, 1977, p.107.

13) René Pomeau, *D'Arouet à Voltaire,* pp. 45-46.

14) 安斎和夫，「歴史家ヴォルテール」，p. 145.

15) Voltaire, *Essai sur les mœurs,* Tome I, éd. de René Pomeau, p. XXIII.
16) 安斎和夫,「歴史家ヴォルテール」, p. 151.
17) Ibid., p. 151.
18) René Pomeau et Christiane Mervaud, *De la Cour au jardin,* p. 207.
19) Ibid., p. 207.

Ⅳ. 人生の一大転機 - プロシア滞在

1) デュ・シャトレ侯爵夫人とヴォルテールに関しては以下の文献を参考のこと：René Vaillot, *Avec Mme Du Châtelet*; René Vaillot, *Madame du Châtelet*, Paris, Albin Michel, 1978；拙著,「シャトレ侯爵夫人の『幸福論』についての一考察」,『西南仏文会仏語仏文研究』第3号, 1985, pp. 15-34.
2) René Pomeau et Christiane Mervaud, *De la Cour au jardin,* pp. 3-4.
3) Ibid., p. 23. ベルリンではプロテスタントの迫害によってフランスから移住してきたユグノーが小さなフランス人社会を形成していた。1747年の人口調査によると，ベルリンの総人口107380人のうちフランス人は7193人を数え，全人口の7％近くを占めていた。またユダヤ人もベルリンには居住していたが，彼らの数はフランス人に比べるとずっと少なく，2007人を数えるのみであったが，彼らの活躍は経済・金融面だけでなく，知的領域でも目覚ましかった。
4) Ibid., p. 13.
5) Ibid., pp. 13-14.
6) Ibid., p. 14.
7) Ibid., p. 19.
8) Ibid., p. 14.
9) Ibid., pp. 16-17.
10) Voltaire, *Correspondance III,* éd. Theodore Besterman, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1975, p. 262, Lettre à Henri Lambert d'Herbogny, marquis de Thibouville, le 24 octobre 1750.
11) René Pomeau et Christiane Mervaud, *De la Cour au jardin,* p. 37.
12) Ibid., pp. 37-38.
13) Ibid., pp. 33-36.
14) Ibid., pp. 39-41.
15) Ibid., p. 40.
16) Ibid., p. 42.
17) Ibid., p. 24.
18) Ibid., pp. 42-46.
19) Voltaire, *Correspondance III,* p. 475, Lettre à Marie-Louise Denis, le 2 septembre 1751.

20) René Pomeau et Christiane Mervaud, *De la Cour au jardin,* p. 54.
21) Ibid., p. 55.
22) Ibid., pp. 106-107.
23) Ibid., pp. 105-106.
24) Ibid., p. 107.
25) Ibid., p. 108.
26) Ibid., pp. 109-115.
27) Voltaire, *Correspondance III*, Lettre à Formey, le 17 janvier 1753.
28) René Pomeau et Christiane Mervaud, *De la Cour au jardin,* pp. 117-118.
29) Ibid., p. 110.
30) Ibid., p. 118.
31) Frédéric II, *Œuvres,* xxvii.232, cité par Pomeau, *De la Cour au jardin,* p. 116.
32) Ibid, pp. 118-119.
33) Ibid., p. 120.
34) Ibid., pp. 135-138.
35) Ibid., pp. 139-140.
36) Ibid., p. 145.
37) Ibid., p. 149.
38) Ibid., pp. 156.
39) Ibid., p. 163.
40) Ibid., p. 174.　この金額はさまざまな場面で用事を頼まれた使用人たちへのチップ，荷物の運搬・保管費用，市当局に委託された業務の費用などを含み，190フローリンという高額であった。
41) Ibid., p. 180.
42) Ibid., p. 191.
43) Ibid., p. 179.

V．啓蒙哲学者ヴォルテール誕生

1) René Pomeau et Christiane Mervaud, *De la Cour au jardin,* p. 178.
2) Ibid., p. 182-183. ただこの都市建設費用はパラチナ選帝侯の領土の予算規模をはるかに越えていて，恐らく借金によってその費用もまかなわれたようで，この数十年後パラチナ選帝侯は破産に追い込まれる。このヴォルテールの訪問の際にも彼に10万リーヴルの借金の申し出があったようである（Ibid., p. 184)。
3) Ibid., p. 183.
4) Ibid., p. 188.
5) Ibid., p. 193.
6) Ibid., pp. 198-201.

7）Ibid., pp. 207-209.

8）Ibid., pp. 210-211.

9）Ibid., p. 241.

10）Voltaire, *Correspondance IV,* Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1978, p. 422, Lettre à Jean-Robert Tronchin, le 5 avril 1755; p. 431 , Lettre à Jean-Robert Tronchin, le 18 avril 1755.

11）René Pomeau et Christiane Mervaud, *De la Cour au jardin,* pp. 248-249.

12）Ibid., pp. 265-266.

13）ヴォルテールがリスボンの大地震によって受けた衝撃や当時行った考察に関しては，拙著，『『カンディッド』の思想的背景—最善観をめぐって』，九州フランス文学会，フランス文学論集，第36号，2001年10月，pp. 8-11参照。

14）René Pomeau et Christiane Mervaud, *De la Cour au jardin,* pp. 103-129.

15）７年戦争をめぐるザクセン＝ゴータ公爵夫人の反応については，拙著，『『カンディッド』の思想的背景—最善観をめぐって』，pp. 10-13参照。

16）René Pomeau et Christiane Mervaud, *De la Cour au jardin*, p. 345. またリスボンの大地震から『カンディッド』執筆にいたる経緯に関しては，Jacques van den Heuvel, *Voltaire dans des contes*, Paris, Armand Colin, 1970, p. 237 et suiv. に詳しく書かれている。

17）「カラス事件」というのは，トゥルーズのプロテスタントの商人ジャン・カラスが，カトリックへ改宗したいという息子の意向に反対したために，結局息子を自殺に追いやったという理由で，トゥルーズの高等法院が彼に死刑の判決を下し，車裂きの刑に処した事件を指す。ヴォルテールは最初この事件への介入をためらったが，ジュネーヴのプロテスタントの知人やカラスの家族に請われて以降はあらゆる手段を用いてジャン・カラスの名誉回復を訴え，最終的に無罪を勝ち取った。彼はこれ以降，「シルヴァン事件」，「ラリー事件」などを次々に手がけていく。なお，これらの事件に関しては次の文献を参照のこと：Rémy Bijaoui, *Voltaire avocat, Calas, Sirven et autres affaires,* Paris, Tallandier, 1994.

18）René Pomeau, *Voltaire,* p. 36.

19）Michel Delon, Robert Mauzi et Sylvain Menant, *Littérature française, T. 6. De l'Encyclopédie aux Méditations*, Paris, Arthaud, 1984, p. 296.「政治参加の作家」としてはサルトルが有名であるが，実はサルトルよりもさかのぼること200年前にヴォルテールは「政治参加の作家」，あるいは「政治参加の哲学者」という概念をフランス社会にすでに導入していたのである。彼の後には，ユゴー，ゾラ，アナトール・フランス，ロマン・ローラン，サルトルなどが政治参加の作家として続いた（René Pomeau, *Voltaire,* p. 34)。ここからも，ヴォルテールがいかに行動する啓蒙哲学者であったかが分かる。

20）René Pomeau, "Si François-Marie Arouet n'avait pas vécu...", p. 16.

21) モンテスキューとヴォルテールのライバル意識について付言すれば，モンテスキューとヴォルテールはすでに示したように5才ほどモンテスキューの方が年上ではあるが，ともにルイ14世の治世の最後とオルレアン公フィリップの摂政時代を若き日に経験している点で，同年代に属している。また，モンテスキューは貴族で，ヴォルテールは裕福なブルジョワ出身と，出身階級は異なってはいたものの，ブルジョワ階級が次第に台頭しつつあった18世紀前半には，この二つの階級は経済的には拮抗しながらも，文化的には共有する部分もあり，モンテスキューとヴォルテールの交際範囲や交友関係もそれほど異なってはいなかった。彼らはともに数年にわたるイギリス滞在を経験し，そのためにフランスを客観的に見ることができたという点でも似通っている。当時のイギリスはすでに17世紀末に市民革命を経験し，王制でありながらもある意味で民主的な市民社会が育っていたために，当時のフランスに比べれば，いろいろな意味で先進国であり，学ぶべき点も多かったと言えよう。こうしたイギリスでの見聞をもとにして著したのが，ジャンルは異なるものの，モンテスキューは『ペルシャ人の手紙』であり，ヴォルテールは『哲学書簡』である。彼らはまた思想的な側面から見ても非常に似た部分が多いように思われる。双方ともイギリスを手本とした啓蒙君主による民主的な王制を唱えていた。また，彼らの歴史や地理に対する見方や考え方にも共通部分があり，それぞれ歴史書や地理に関する著書がある。歴史書としてモンテスキューは『ローマ人の栄枯盛衰に関する考察 *Considération sur les causes de la grandeur des Romains et de leur décadence*』(1734) を書き，片やヴォルテールの方は『ルイ14世の世紀』に代表されるさまざまな歴史書を著している。また，モンテスキューの『法の精神』とヴォルテールの『習俗試論』にも類似点が多い。例えば，気候が人々や宗教，風俗に及ぼす影響を重視している点なども多少の違いはあれ似通っている。もちろん，モンテスキューは法律家の息子として生まれ，自らも法律家としての教育を受け，若くしてボルドー高等法院の院長（1726）になった経歴から見ても分かるように，彼の物事に対する見方は客観的であり，思考も論理的であった。これに比べて，後に述べるように，ヴォルテールはさまざまなジャンルに挑戦し，それなりに評価できる水準の作品を著してはいるが，彼は元来文学者であることから，時には文学的思考に左右されることもあった。彼らは似通っていながらも，恐らく似たもの同士であるがゆえに，それをお互いに感じ取って，牽制しあっていたのではないかと思われる。フランス啓蒙思想家たちを大きく二つに分けるならば，モンテスキューとヴォルテールの先行組と，ルソーやディドロに代表される後続組に分けることができるのではないだろうか。

22) René Pomeau, *Voltaire,* p. 36.

23) ヴォルテールは，さまざまな統計資料などから割り出して，当時の平均寿命を23才とし，それを『哲学辞典』の中で記している。もちろん，当時は階級によって生活の質が非常に異なり，平均寿命も当然のことながら階級差が大きかった。例

えば，栄養状態と衛生状態が非常に劣悪であった下層階級や農民は短い一生を終えていた.それに比べると彼が属していた富裕階級は格段に長生きであった。しかしながら，66才で死んだモンテスキューの例を見ても分かるように，当時60才といえば最晩年とまではいかなくてもすでに晩年に属していたと言えよう。

24) René Pomeau, "Si François-Marie Arouet n'avait pas vécu...", p. 15. ヴォルテールの『哲学書簡』の出版後にパリで匿名の『人物描写』が出回り，彼に関して「一言で言えば，ヴォルテール氏は並外れた人物でいようとしているが，間違いなくそうである」というような描写がなされていた。もちろん，この時ヴォルテールはまだ30代後半であったが，この「並外れた人物」はこれ以降40年も並外れた人物のままでいた。

25) Pierre Chartier, *Candide de Voltaire,* Col. Foliothèque, Paris, Gallimard, 1994, p. 15.

Ⅵ. 啓蒙哲学者ヴォルテール

1) Christiane Mervaud, *Voltaire en toutes lettres,* p. 113.

2) Ibid., p. 116.

3) プロシア滞在当時のヴォルテールの秘書であったコリーニによると，『哲学辞典』の構想が最初にヴォルテールの口から出たのは，1752年９月28日のポツダム宮におけるフリードリッヒ主宰のベルリンアカデミー会員たちとの夕食会の時であった。しかし，構想自体はその前からすでにヴォルテールの頭の中にあったようである（Ibid., p. 116)。ポツダムの夕食会では会食者たちはフリードリッヒを中心に神をも恐れぬ反宗教的で自由な会話を楽しんでいた。

3) Ibid., p. 115.

4) Ibid., p. 73.

Ⅶ. コント作家ヴォルテール

1) ヴォルテールはフランス文学史上一二を争う多作の作家として知られている。その証拠に，トゥルッソン氏やヴェルクリュイス氏らが中心になって編集したヴォルテールの作品群の解説書は『ヴォルテール辞典』と名うつほど彼の多数の作品名とその詳細な解説が載せられている（Voir, Sous la direction de Jacques Lemaire, Raymond Trousson et JeroomVercruysse, *Dictionnaire Voltaire,* Paris, Achette, 1994)。

2) この点に関しては，Jacques van den Heuvel, *Voltaire dans ses contes,* p. 68 et suiv. に詳しく書かれている。

3) Christiane Mervaud, *Voltaire en toutes lettres,* p. 75. ヴォルテールが初めてコントらしきものを書いたのは，本格的にコント執筆を開始することになる1740年代からさかのぼること30年も昔の1714年―1716年頃のことである。当時彼はメー

ヌ公爵夫人 Louise Bénédicte de Bourbon-Condé, duchesse du Maine が主催するソーの館の夕べに通っていたが，そこで夫人を楽しませるために即興的に作ったのが最初である。作品としては『片目の担ぎ人夫 *Le Crocheteur borgne*』（1714年か1715年頃に書かれたものと推定される）と『コジ＝サンクタ *Cosi-Sancta*』（これも『片目の担ぎ人夫』と同じ時期の作品と推定される）がある。また当時ヴォルテールは韻文でもコントを書いていて，作品としては『南京錠 *Le Cadenas*』（ケール版によれば，1714年作であるが，彼の書簡から推定すれば，むしろ1716年の作と思われる）や『寝取られ男 *Le Cocuage*』（ケール版によれば，1716年の作と思われる）がある。韻文のコントについては，Voltaire, *Contes en Vers et en Prose,* Tome I, Edition de Sylvain Menant, Classiques Garnier, Paris, Bordas, 1922, pp. 1-37参照のこと。

4）Christiane Mervaud, *Voltaire en toutes lettres,* p. 72.

5）Ibid, pp. 72-73. ヴォルテールはコントのことを自らの哲学コントの中で様々に形容している。例えば，「哲学的冗談」（『ミクロメガス』），「くだらない話」（『スキャルメンタッド』），「一種の短編小説」，「愚かなこと」（『カンディッド』），「短い小説」などである。また，当時はコントと小説を区別する明確な定義はなく，長さでようやくコントと小説が分けられていた程度であった。ヴォルテールの場合は，1771年に出版された『ヴォルテール全集』で初めて『小説，哲学コント』と題して一つにまとめられた。

6）Ibid., p. 74.

7）Ibid., p. 3.

8）René Pomeau, *Voltaire,* p. 94.

9）Christiane Mervaud, *Voltaire en toutes lettres,* p. 75.

Ⅷ．結論

1）André Magnan, *Voltaire, Candide ou l'Optimisme,* Paris, Presses Universitaires de France, 1995, p. 5.

2）Voltaire, *Romans et contes,* Edition établie par Frédéric Deloffre et Jacques van den Heuvel, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1979, notice par Jacques van den Heuvel, p. 817.

3）拙書，『ヴォルテールの『ランジェニュ』に見る復活・存続への願望』，西南仏文会，フランス語フランス文学研究，第4号，pp. 1-24参照。

4）Christiane Mervaud, *Voltaire en toutes lettres,* p. 111.

5）Voltaire, *Micromégas, Zadig, Candide,* Introduction, notes, bibliographie, chronologie par René Pomeau, Paris, GF-Flammarion, Introduction, pp. 38-39. ポモーによれば，1759年だけで，海賊版も含めて，17版で20000部が出版された。当時の平均的な出版部数が500部から1000部であったことから考えると，

この20000部という発行部数はいかに驚異的な数であったかが分かる。

6）André Magnan, *Voltaire, Candide ou l'Optimisme*, p. 5.